

全国学力・学習状況調査の結果について

文部科学省 総合教育政策局

参事官（調査企画担当）付 学力調査室

目次

1. 令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）のポイント …p. 3
2. 令和6年度全国学力・学習状況調査 経年変化分析調査・保護者に対する調査の結果（概要）のポイント

参考資料

1. 令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）より抜粋 …p. 19
2. 令和7年度全国学力・学習状況調査の結果公表③のポイントより抜粋 …p. 34
3. 令和7年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」について …p. 35

調査目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、
- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 - 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
 - そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

調査概要

調査実施日	令和7年4月14日(月)～17日(木)
調査対象	小学校6年生、中学校3年生【悉皆】
調査事項	①児童生徒：教科調査〔国語、算数・数学、理科〕 / 質問調査 ②学 校：質問調査
調査問題	・学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題。 ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信。
今年度の調査の特徴	・CBT調査の導入（中学校理科） ・生徒質問でのランダム方式の試行 ・多様な生徒の状況把握 ・結果公表の内容、スケジュールの改善

調査結果の取扱いの改善の方向性

- 令和7年度から、国による結果公表を3段階に分けて実施。
○児童生徒の学びへの還元を最優先に、学校への結果返却時期を前倒し（公表①）。全国データに基づく分析結果をより効果的に発信、都道府県・指定都市の主体的な分析期間を確保（公表②）。全国データや都道府県・指定都市別データを多面的に分析（公表③※）

7/14 公表①	全国的な実施状況、学校向け帳票・個人票提供
7/31 公表②	全国データに基づく分析結果
9/30 公表③	都道府県・指定都市別データに基づく分析結果

全国（国公私）の平均正答数（率）・平均IRTスコア

小学校						中学校					
国語		算数		理科		国語		数学		理科	
9.4/14 問 (67.0%)		9.3/16 問 (58.2%)		9.7/17 問 (57.3%)		7.6/14 問 (54.6%)		7.3/15 問 (48.8%)		505	
男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
63.1%	70.9%	59.0%	57.3%	55.8%	58.8%	52.0%	57.4%	49.1%	48.6%	503	508

- ※都道府県・指定都市別の結果公表の在り方
- 本調査の目的を達成する観点から、学びの改善につながる各種データを正確かつ効果的に公表し、調査実施主体として国が説明責任を果たす。
- 引き続き都道府県・指定都市の単位で平均正答率・スコアを含む結果公表を行いつつ、多面的な調査結果を示し方に改善する。
- ＜公表③でお示しした主な内容＞
- ・分布や習熟度に見配りした統計表やグラフなどを示す
 - ・学力に影響をする他の様々な要素も組み合わせてメッセージを示す
 - ・質問調査も合わせた結果全体について、特徴を把握しやすい形で示す
 - ・表・グラフに加え、記述的な説明を充実する

CBT調査の実施状況

※調査対象の児童生徒のいる各学校から提出された「調査終了報告」、令和7年5月13日付け事務連絡にて依頼した「実施後アンケート」、及びMEXCBTに記録された結果に基づき集計。

「中学校理科」 の実施状況

参加した学校数（中学校等）：9,611校
 うち「中学校理科」を実施した学校数：9,599校（実施率 99.88%）
 うち「中学校理科」を実施しなかった学校数：12校（未実施率 0.12%）

「中学校理科」を実施した学校数				「中学校理科」を実施しなかった学校数	
調査実施日に調査を実施、完了した学校数	調査実施日に調査が完了せず、後日実施を行った学校数			実施準備・操作面の理由	その他（生徒の体調不良等）
	ネットワーク・端末等の理由	実施準備面の理由	その他		
9,497校 (98.82%)	18校 (0.19%)	26校 (0.27%)	58校 (0.60%)	4校 (0.04%)	8校 (0.08%)

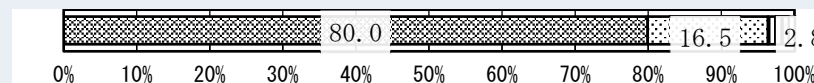
「中学校理科」を実施しなかった学校の不実施理由

- ◆実施準備・操作面の理由：4校（例）後日実施期間があることを知らなかった／学習eポータルアカウントを準備していなかった
- ◆その他（生徒の体調不良等）：8校

生徒質問調査の結果より

（質問）今年度の中学校理科の教科調査は、コンピュータを使っでの実施でしたが、機器の不具合等の影響で解答しにくいと感じることがありましたか。

全くなかった：80.0% 時々あった：16.5%
 多くあった：2.8% 無回答：0.7%



学校外実施 の状況

オンライン方式の中学校理科又は児童生徒質問調査を学校外で実施した児童生徒数

※令和7年5月13日付け事務連絡にて依頼した「実施後アンケート」の集計結果（速報値）。

小学校児童：2,887人 中学校生徒：1,639人

支援が必要な児童生徒の参加状況

※令和7年5月13日付け事務連絡にて依頼した「実施後アンケート」の集計結果（速報値）。

小学校（回収率：65.7%）			中学校（回収率：62.3%）		
長期欠席児童	障害がある児童	日本語指導が必要な児童	長期欠席生徒	障害がある生徒	日本語指導が必要な生徒
11,314人	26,545人	2,626人	14,893人	8,322人	1,635人



※ □ 内の数字は相関係数

- 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることに引き続き課題が見られた。
- 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことに課題が見られた。
→文章を読む目的を明確にして必要な情報を捉えること、伝えたいことの根拠を明確にして書くことを意識させることが重要。

小学校国語 大問3三(2)

目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる問題

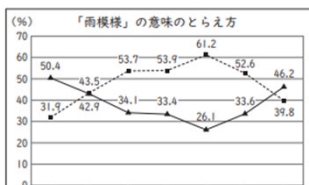
【資料1】「あたらしい」は新しい形

「あたらしい」は「新しい」という意味で、私たちは「新しい」といいます。でも、大昔の奈良時代には「あたらし」と言っていました。今でも「新しく」という意味で「あたらし」と言うでしょう。「あたらし」は、大昔から使われていました。ところが、次の平安時代には「あたらし」が「あたらし」になりました。「あたらし」の順番が入れかわっています。つまり、「あたらし」に比べれば「あたらし」は新しい形です。それが変化して、今では「あたらしい」になりました。

【資料3】

今、あなたは「勉強がとてつもない」という言い方を覚えたとは思われないでしょう。「とてつもない」は「非常に」の意味を表します。ところが、1000年ほど前の大正時代、作家の芥川龍之介は、「とても安い」「とても楽しい」という言い方は新しいと書いています。それより前の時代には、「とてもかたわらない」「とてもとまらぬ」というように、「とてもくさい」の形で使ったというのです。

【資料4】



(注)紙面の関係で資料1～4は一部分のみ掲載している。

(文化庁「令和4年度国語に関する世論調査」による。)

【資料1】言葉の変化について
自分が納得したことを、次の条件に合わせて書く。

条件①納得したことを【資料1】から言葉や文を取り上げて書くこと。

条件②納得した理由を【資料2】、【資料3】、【資料4】の中から選び、言葉や文を取り上げて書くこと。

中学校国語 大問1四

自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる問題

【ちらし】に小学生の感想をもとに今年の美術展で工夫したことを書き加える。

条件1：今年の美術展の【工夫】と、【工夫】と結び付く小学生の【感想の一部】を選択する。

条件2：1で選んだ【工夫】と【感想の一部】との関係が分かるように、接続する語句や指示する語句を用いて書く。

【ちらし】(更新版②)

第一中学校 美術展

毎年、秋に行っている第一中学校の美術展のお知らせです。
私たちが美術の時間につくった作品を展示します。どれもかかしんの出来です。

今年は、中学生による作品の説明や小学生向けの体験コーナーもあります。

第一小学校6年生のみなさんへ

【工夫】

A 作品に込めた思いや作品をつくる過程について、中学生が、来場者の求めに応じて説明する。

【感想の一部】

A どうやってあんなすばらしい作品をつくったのか知りたくなりました。美術でどんなことを学べるのが楽しみです。

イ いろいろな作品が展示されていて楽しかったです。思いのこもった作品が多いように感じました。

(注)紙面の関係で資料は一部分のみ掲載している。

正答例

(正答率
31.2%)

昨年の来場者から、どうやって作品を作ったのか知りたくなったという感想をもらいました。そこで、今年は中学生が作品について説明します。気になる作品があったら、ぜひ中学生に質問してください。

誤答例

今年の美術展では、中学生が作品について説明します。昨年参加した小学生の感想に、いろいろな作品が展示されていて楽しかったという声がありました。



納得したことは書けたが、納得した理由を複数の資料から取り上げて書けず、条件②を満たせなかった児童がいた(線部分)。



伝えたい事柄とその根拠を適切に結び付けながら、自分の考えが伝わる文章になるように書くことなどに課題がある生徒がいた。

2 教科に関する調査結果（算数・数学）



※ □ 内の数字は相関係数

R7

- 数直線上の分数を捉えることや、百分率を倍を使って捉え直し表現することに課題が見られた。
- あらかじめ書かれている図形の証明を評価・改善することに課題が見られた。

→基準となる数を見だし数量の関係を捉えさせることや、数学的な用語や表現について知識の習得と習得した知識を活用する活動を行き来しながら理解を深めていくことが重要。

小学校算数 大問3(3)

数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる問題



数直線上に示された数を分数で書く。

数直線上に示された1より大きい数を、1より大きい分数として捉えて表すことができていない児童がいた。

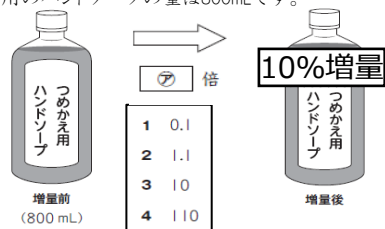
正答 正答率 35.4%	ア: $\frac{1}{3}$ イ: $\frac{5}{3}$ 又は $1\frac{2}{3}$
誤答例	イを $\frac{5}{6}$ 又は $\frac{2}{3}$ と解答

※分母の異なる分数の足し算 ($\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$) はできている (正答率81.5%)

小学校算数 大問4(4)

「10%増量」の意味を解釈し、「増加後の量」が「増加前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる問題

広告には、つめかえ用のハンドソープが「10%増量」と書かれています。増量前のつめかえ用のハンドソープの量は800mLです。



10%増量のつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選択する。

正答 正答率 41.3%	1.1倍
誤答例	0.1倍 10倍

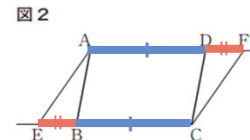
増量後のハンドソープの量は、増量前のハンドソープの量の何倍ですか。(選択肢式)

「10%増量」とは、増加前の量の1.1倍になっていることだと解釈できていない児童がいた。

中学校数学 大問9(2)

統合的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる問題

(2) 次の図2のように、平行四辺形ABCDの辺CB、ADを延長した直線上に、BE = DFとなる点E、Fをそれぞれとって、四角形AECFは平行四辺形になります。このことは、前ページの証明1の一部を書き直すことで証明できます。書き直すことが必要な部分を、下のアからオまでの中から1つ選び、正しく書き直さない。



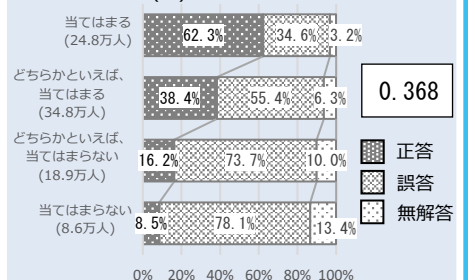
四角形AECFは平行四辺形となることの証明のうち、変更が必要な部分を選択し、書き直す。

既に書かれている証明が適切かどうかを評価できない生徒がいた。

ア	平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、 AD // BC よって、AF // EC①
イ	平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、 AD = BC②
ウ	仮定より、 DF = BE③
エ	②、③より、 AD - DF = BC - BE④
オ	④より、 AF = EC⑤ ①、⑤より、 1組の向かい合う辺が平行でその長さが等しいから、 四角形AECFは平行四辺形である。

クロス分析

生徒質問調査〔59〕「文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、書かれていることを理解することができますか」の各選択肢を選んだ生徒の本設問における解答状況(%)



正答例 正答率 37.0%	誤っている部分 : エ (誤) $AD - DF = BC - BE$ (正) $AD + DF = BC + BE$
誤答例	・エを選択したが、書き直しについては無解答 ・誤っている部分としてア・イ・ウを選択

2 教科に関する調査結果（理科）



※ □内の数字は相関係数

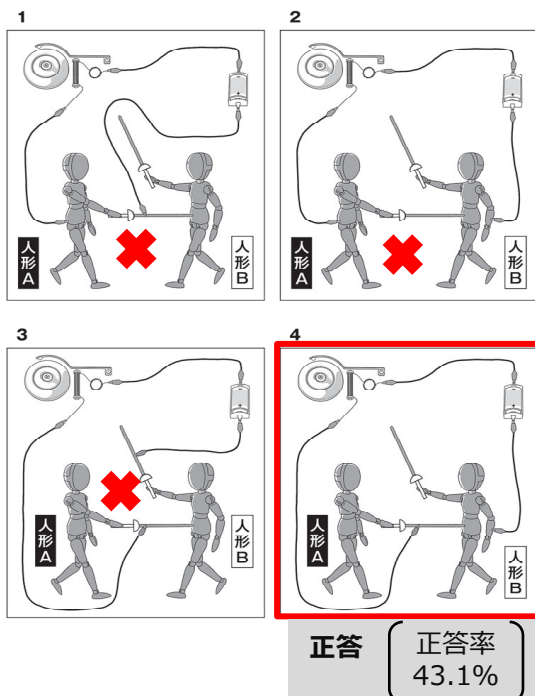
R7

- 電気が通る回路を実際の生活の中でつくることに関する理解に課題が見られた。
 - 化学変化を原子や分子のモデルで表すことに課題が見られた。
- 問題解決や科学的な探究のプロセスを通して、学習を通して身に付けた知識を活用することができるような指導の充実が重要。

小学校理科 大問2(2)

電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかをみる問題

電気を通す物（グレー）と通さない物（白）でできたフェンシングの人形について、人形Aの剣を人形Bに当てたときだけ、ベルが鳴る回路を選ぶ。



💡 電気が通る回路のつくり方に関して理解し、表現できていない児童がいた。

中学校理科 大問5(2)

化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる問題



動画



図

ドライアイスを使用して二酸化炭素中でマグネシウムを燃焼させる実験動画



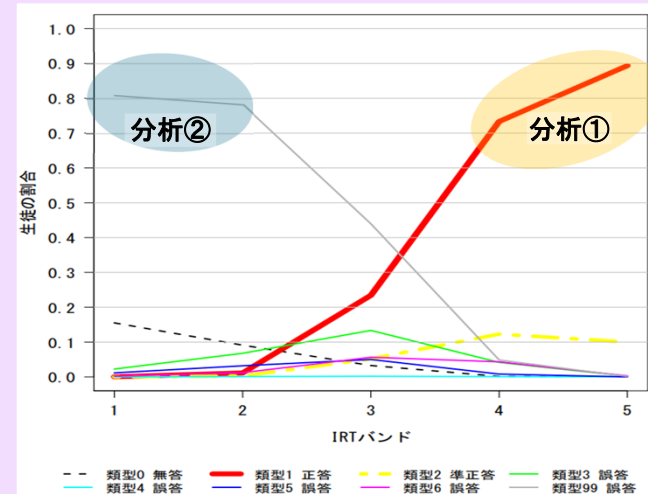
二酸化炭素の中でマグネシウムが燃焼する際の化学反応について、原子や分子のモデルで表す

正答例 〔正答率 35.8 %〕	
誤答例	



化学変化で生じている反応について十分に理解していない生徒がいた。

G-P分析図(Good-Poor Analysis)



分析①：IRTバンド4、5に属する7割強の生徒は、正答

分析②：IRTバンド1、2に属する8割以上の生徒、IRTバンド3に属する約4割の生徒が、解答類型99（反応する物質と生成してできた物質が何かを整理できていない）

IRTバンド3以下に属する生徒には、まずは「何が反応して、何が生成したのか」を整理できるような指導の改善が必要である。

中学校理科の報告書等においては、全体の解答状況（類型反応等）に加えて、G-P分析図を活用。

IRTバンドごとの解答状況に特徴がみられた問題の分析により、「個に応じた指導」の更なる充実を推進。

分析③について(報告書P.95)

☆IRT バンド3に属する生徒では、「物質を正しく原子や分子のモデルで表しているが、化学変化の前後で原子の種類や数が変化している」解答類型3と解答している割合が一定数みられる。

☆具体的な授業場面



反応する物質、生成する物質が整理できました。
化学変化は、
マグネシウム+二酸化炭素→酸化マグネシウム+炭素
と考えることができますね。
原子と分子のモデルを用いて、化学変化を表すときの注意点は
何だったでしょうか。

原子の種類と数を考える
といいですね。



「化学変化の前後で、原子
の数は変わらない」という
性質もあったね。

「化学変化の前後で、原子の種類
は変わらない」という性質があり
ました。



それでは、確認した注意点を基に、タブレット
端末を使って、原子や分子を使って化学変化を
表してみましょう。



原子の種類や数が変化
しないことに注意して、
モデルを使って表して
みよう。

G-P分析図(大問5(2))



分析②について(報告書P.94)

☆IRT バンド1、2に属する8割以上の生徒が、解答類型99の「上記以外の解答」である。
動画を見て、「反応する物質が何で、生成する物質が何である」ということから確認して、
化学反応式を考えることが大切である。

☆具体的な授業場面



動画を見て、何が反応して、何が生成したかを
考えてみましょう。

ドライアイスの中で、
マグネシウムを燃やしたね。



反応した後は、白い粉末ができて
いました。これは酸化マグネシウム
ですね。

ドライアイスは二酸化炭素の
固体でしたね。
ということは、マグネシウムと
二酸化炭素が反応する物質
ですね。

黒い粒は炭素ですね。



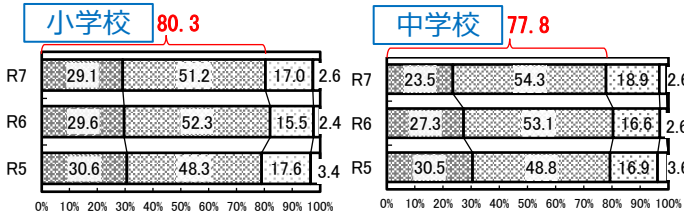
反応する物質、生成する物質が整理できましたね。
よって、「マグネシウム+二酸化炭素→酸化マグネシウム+炭素」
というように考えることができますね。

学習指導要領の趣旨を踏まえた取組

- ◆ 昨年度までと同様、約80%の児童生徒が「**主体的・対話的で深い学び**」に取り組んだと考えている。

課題の解決に向けて自分から取り組んだ

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない



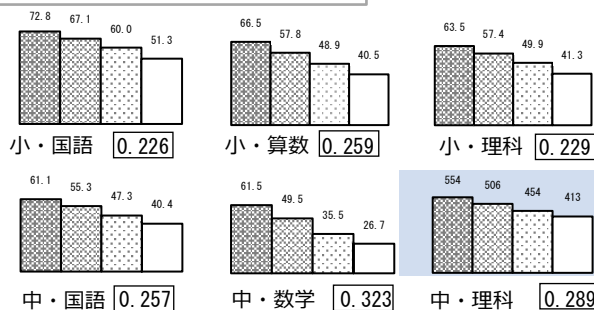
- ◆ 「**主体的・対話的で深い学び**」に取り組んだと考える児童生徒ほど、**各教科の正答率・スコア**が高い傾向。

児童生徒質問「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」の選択肢ごとの教科の正答率・スコア

課題の解決に向けて自分から取り組んだ

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない

選択肢ごとの教科の平均正答率・スコア



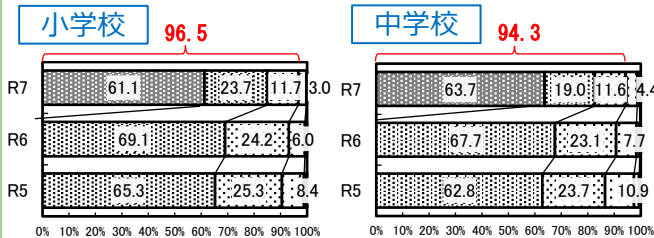
※「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」以外の「主体的・対話的で深い学び」に関する回答でも同様の傾向。

ICT機器の活用

- ◆ ICT機器を「**ほぼ毎日**」「**週3回以上**」活用する学校は、**小学校97%、中学校94%**。

【学校】タブレットなどのICT機器を使用した頻度

ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
 週3回以上
 週1回以上
 月1回以上
 月1回未満



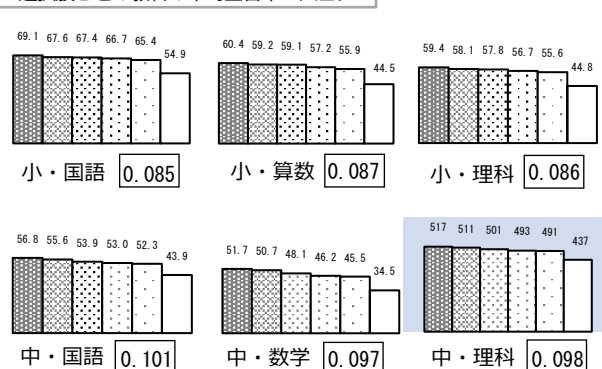
- ◆ ICT機器を使用する頻度と各教科の正答率・スコアとの間に、一定の関係が見られる。

児童生徒質問「PC・タブレットなどのICT機器を使用した頻度」の選択肢ごとの教科の正答率・スコア

【児童生徒】タブレットなどのICT機器を使用した頻度

ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
 週3回以上
 週1回以上
 月1回以上
 月1回未満

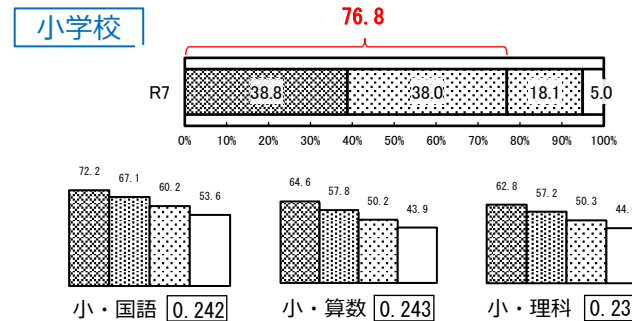
選択肢ごとの教科の平均正答率・スコア



- ◆ ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、**各教科の正答率・スコア**が高い傾向。

学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成できる

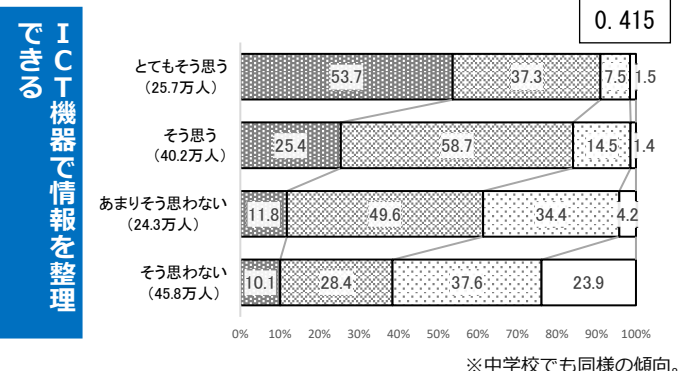
とてもそう思う
 そう思う
 あまりそう思わない
 そう思わない



- ◆ ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、**探究的な学び**に取り組んだと回答している。

小学校 学んだことを生かしながら考えをまとめていた

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない



3 質問調査結果（児童生徒、学校）②

※ □内の数字は相関係数

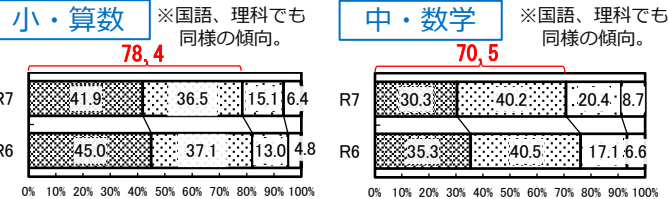
R7

各教科への興味・関心、理解度

- ◆「授業の内容がよく分かる」児童生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られるが、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が全教科で前回調査から減少。

授業の内容がよく分かる

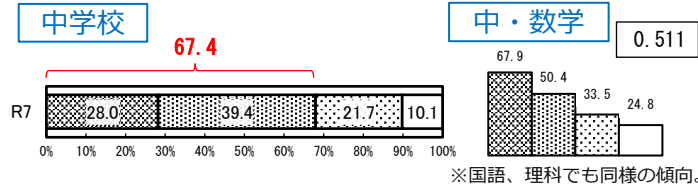
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない



- ◆文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、書かれていることを理解できる生徒は67%。

文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、書かれていることを理解することができる（新規）

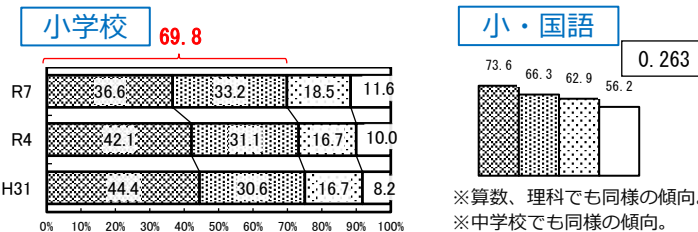
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない



- ◆読書が好きな児童生徒の割合が減少傾向。

読書は好きですか

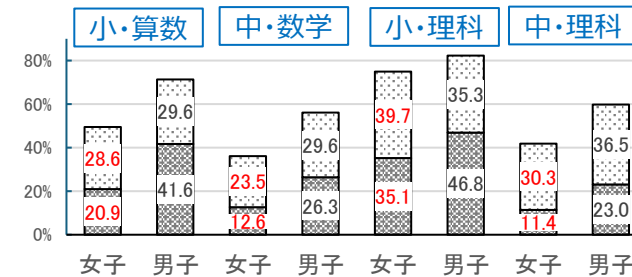
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない



- ◆算数・数学、理科の平均正答率・スコアの大きな男女差は見られない一方、「得意」と考える割合は、女子の方が男子より低い。

各教科が得意だ（新規）

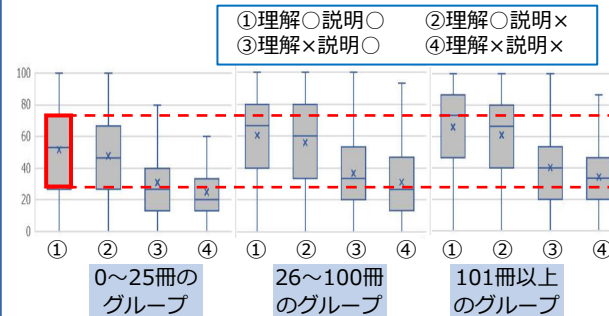
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる



- ◆算数・数学、理科の上位層で「得意ではない」者は、「授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていない」と回答した割合が大きい。

- ◆低いSES（社会経済的背景）でも「文字式や証明を読んで理解する」「説明活動をする」の両方に取り組んだ児童生徒は、高いSESで取り組めていない者よりも数学の正答率が高い。

SES別に見た「理解する」「説明する」の取組状況に応じた数学の正答率



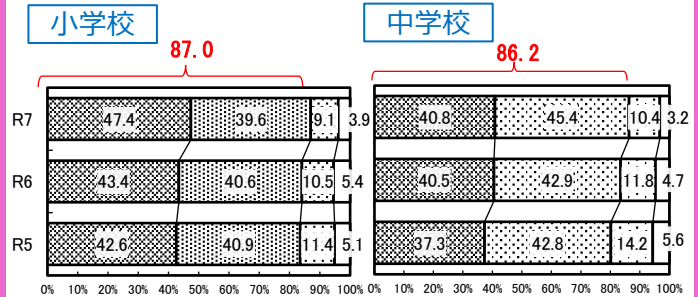
低SES（本が0~25冊）で「①」と回答したグループの箱ひげ図の赤い箱は、中SES（26~100冊）・高SES（101冊～）で「③」「④」と回答したグループの箱より上（正答率が高い位置）にある。

ウェルビーイング

- ◆「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童生徒は85%以上で、微増。

自分には、よいところがあると思う

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

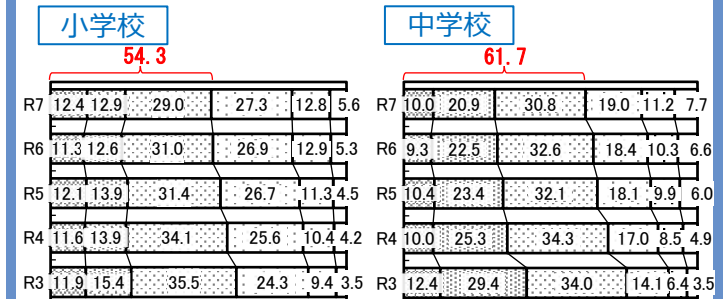


学校外での過ごし方

- ◆学校の授業時間以外の勉強時間は、小・中学生とも令和3年度以降、平日、休日いずれも減少傾向。

平日の勉強時間（学習塾で勉強している時間等を含む）

■ 3時間以上 ■ 2時間以上、3時間より少ない
■ 1時間以上、2時間より少ない ■ 30分以上、1時間より少ない
■ 30分より少ない □ 全くしない



(1) 分布や習熟度を目配りした統計表やグラフ

① 都道府県（指定都市を含む）別

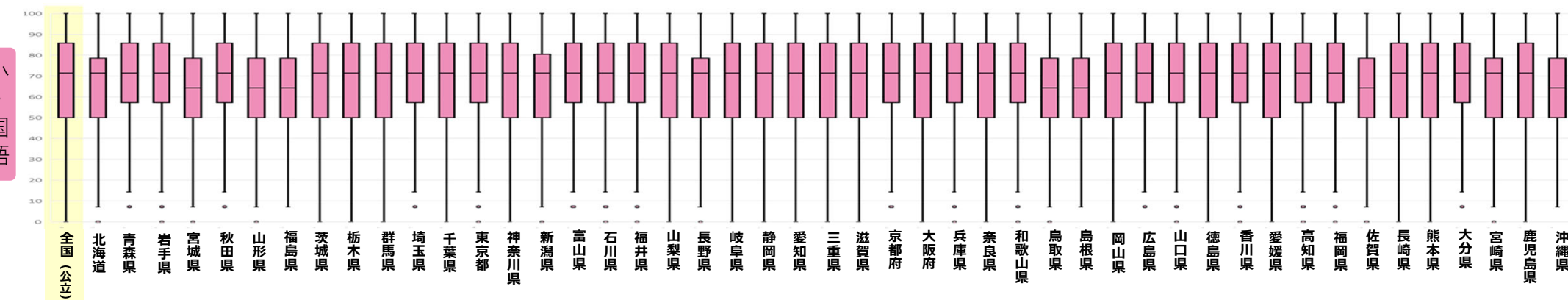
箱ひげ図

ポイント

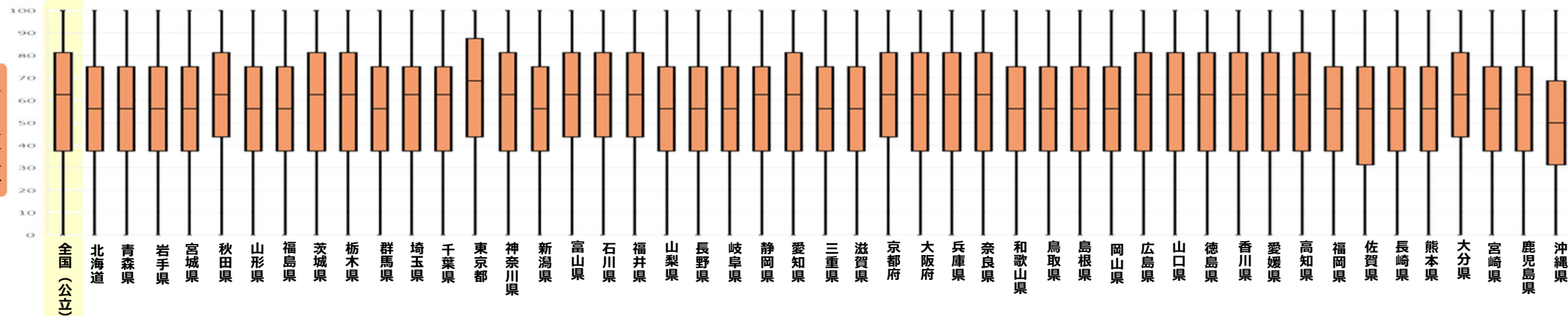
全ての教科において、各都道府県の平均正答率の分布は、全国的なばらつきの傾向と大きな差はみられない。

縦軸：平均正答率

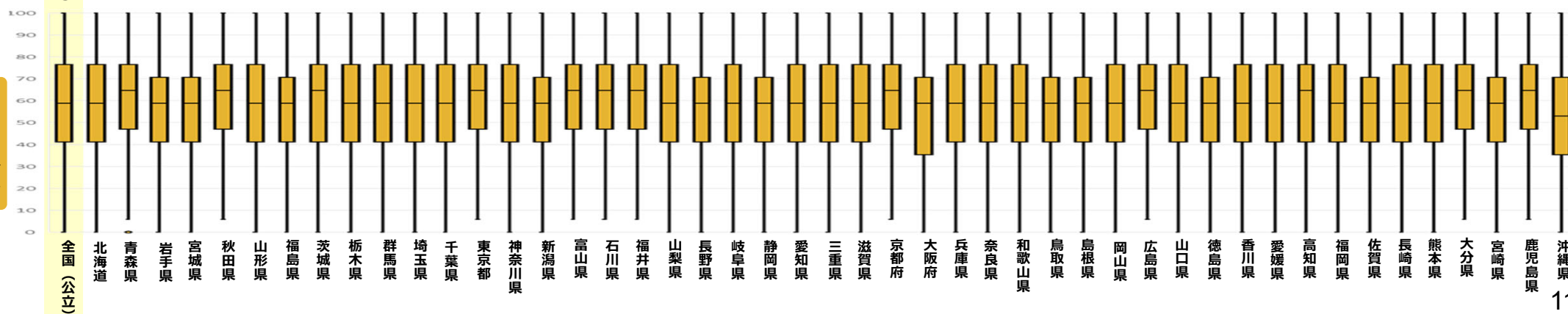
小・国語



小・算数



小・理科

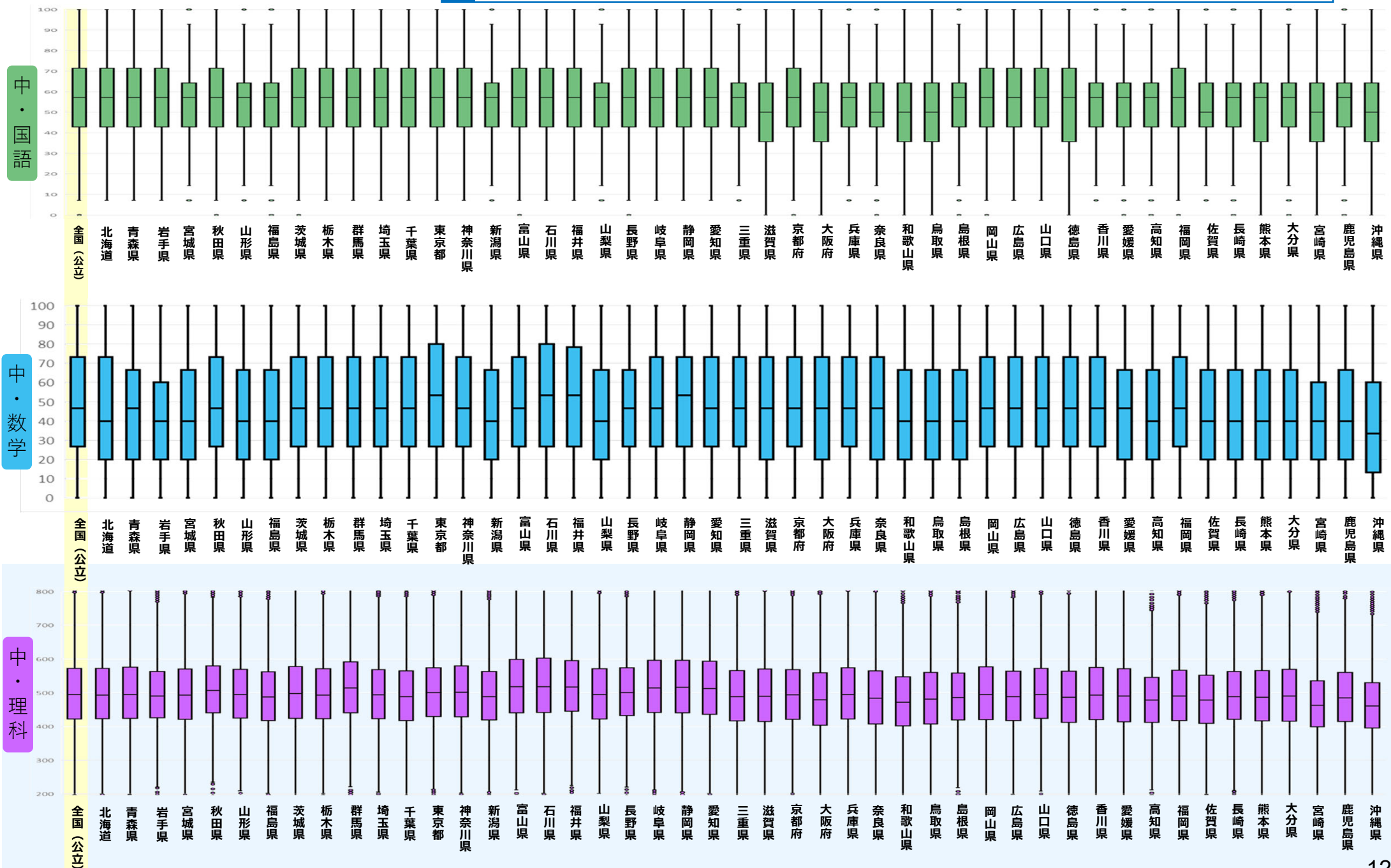


①都道府県（指定都市を含む）別
箱ひげ図

ポイント

全ての教科において、各都道府県の平均正答率・スコアの分布は、全国的なばらつきの傾向と大きな差はみられない。

縦軸：平均正答率・平均IRTスコア



1 学習指導要領の着実な実施・改訂に向けた検討

○ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- 学習指導要領の趣旨・内容の周知・徹底のため、全国の都道府県等教育委員会の指導主事を対象とした協議会を実施。
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた全国の授業づくりの好事例の収集・分析を行い、サポートマガジン「みるみる」として公表。引き続き、事例の普及に取り組む。

○ 指導改善に資する情報提供等（国立教育政策研究所）

- 報告書（授業アイデア例を含む）を作成し、国立教育政策研究所のWebサイトに掲載（教育委員会や学校等で学習指導の改善・充実を図る際に活用）。
- IRTに基づく結果の活用方法について発信。児童生徒の理解の状況に応じた指導について、報告書で解説。
- 全国説明会（各教育委員会、教員養成大学等対象）を開催し、学習指導の改善・充実のポイントを解説（令和7年8月20日・21日オンライン開催）。
- オンラインなども活用しながら、学力調査官等による教育委員会や学校への指導・助言を実施。

○ 学習指導の充実

- 今回明らかになった課題の解決に資するデジタル技術の活用方法について発信を実施。
- 算数・数学について、調査結果で明らかとなった課題を踏まえ、効果的な指導法の開発・普及を行うとともに、全国の教職員向けにオンラインセミナーを開催。
- 小学生等に学校外での自身の興味・関心に沿った楽しく利用できる学習コンテンツについて周知（「たのしくまなび隊」など）

○ 次期学習指導要領に向けた中央教育審議会における検討

- 経済的に困難な背景のある子供たちを含め、子供たち一人一人が必要な資質・能力を育成できるよう、各教科等の改善や柔軟な教育課程編成の在り方について、次期学習指導要領に向けた検討を行う。

2 GIGAスクール構想の更なる取組の推進

○ 学校のICT環境整備の推進

- 更なる活用に向け、共同調達スキームの下での端末の着実な更新や、学校におけるネットワーク環境の改善等を推進。

○ 学校のICT環境を活用した取組

- リーディングDXスクール事業における効果的な実践例の創出・モデル化。
- 学校種別の授業動画など、切れ目のない研修コンテンツの提供。
- GIGA StuDX推進チームによる研修の実施、自治体の課題に応じた支援の提案。
- 学校DX戦略アドバイザーによる相談体制の構築、支援。

3 児童生徒の豊かな心をはぐくむ取組の推進

- 道徳教育や特別活動、体験活動、生徒指導など学校教育活動全体を通じて児童生徒の豊かな心をはぐくむ取組を推進。
- 読書の推進について、発達段階に応じた読書活動の先導的なモデル事業や、学校等における子供の読書活動を推進するための優れた取組の表彰を実施。

4 支援を必要とする児童生徒の支援策の充実

- 実施後アンケートの回答結果を基に、不登校児童生徒、障害のある児童生徒、外国人児童生徒等の解答(回答)を全国レベルで集計し、支援の充実につなげる形で活用。
- 1人1台端末を活用した児童生徒の悩みや不安の早期発見・支援を推進するとともに、ICTを活用した学習も含め、不登校児童生徒が行った学習の成果を成績に反映することができるとを法令上明確化。

5 教師を取り巻く環境整備

○ 指導体制の充実

- 中学校35人学級化（令和8年度から）や、小学校高学年及び中学年で教科担任制の拡充、中学校生徒指導担当教師の配置拡充、貧困など個々の学校が抱える課題への対応等、学校の指導・運営体制の充実。
- 多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するため、教師人材の質の向上と入職経路の拡幅の観点から、教師の養成・採用・研修における必要な改革について、中央教育審議会の審議の中で検討。

○ 子供と向き合う時間の確保

- 教師が教師でなければならない仕事に集中することができるよう、学校における働き方改革の更なる加速化や、教員業務支援員などの支援スタッフの配置充実。
- コミュニティ・スクールを活用した働き方改革に係る取組の充実。

○ 校務DXの推進

- 教職員の事務負担の軽減や効率的で柔軟な働き方の実現、データ利活用・データ連携等を通じた教育活動の高度化に向けて、次世代校務DX環境の整備への支援を加速。

6 調査結果の活用、次回以降の調査の検討

○ 調査の高度化に向けた検討

- CBTを着実に導入し、調査の高度化、きめ細かな分析・返却を実現。
- 結果返却の更なる早期化を検討。

○ 集計結果データの貸与

- 大学等の研究者による多様な学術研究の分析等を促進するため、個票データ等の貸与を実施。

経年変化分析調査・保護者に対する調査の結果（概要）のポイント

1 経年変化分析調査・保護者に対する調査の概要



令和7年7月
文部科学省・国立教育政策研究所

	経年変化分析調査	保護者に対する調査
調査目的	全国的な学力の状況について、経年の変化を把握・分析し、今後の教育施策の検証・改善に役立てる。	家庭状況と学力等の関係について、経年の変化を把握・分析し、今後の教育施策の検証・改善に役立てる。
調査実施日	令和6年5月13日(月)～6月28日(金)	左記期間に学校を通じて実施
調査対象	国・公・私立の小学校6年生、中学校3年生の児童生徒【抽出】	本体調査及び経年変化分析調査を実施した児童生徒の保護者
調査内容	国語、算数・数学、英語（中学校のみ）	児童生徒の家庭における状況、教育に関する考え方等に関する質問調査

	PBT(※1)	CBT(※2)
小学校	国語・算数 各300校(約3万人)	国語・算数 各300校(約3万人)
中学校	国語・数学・英語 各250校(約7万人)	国語・数学・英語 各250校(約7万人)

(※1) 前回までと同様の、冊子を用いた筆記形式

(※2) 児童生徒のICT端末を用いたオンライン方式

- ① 令和6年度調査については、前回までと同じPBTで実施した学校の結果により比較した。
- ② 同一内容をCBTで実施したところ、画面レイアウトや操作等の影響が生じた問題が見られた。

2 経年変化分析調査の結果

平成28年度、令和3年度、令和6年度（PBT実施校）の結果を比較したところ、各教科において以下のようなことが観察された。ただし、全国の本調査のスコア分布の状況に関する変化の有無は中長期的に継続して分析する必要があり、次回（令和9年度予定）以降の結果もあわせて引き続き分析していくこととする。

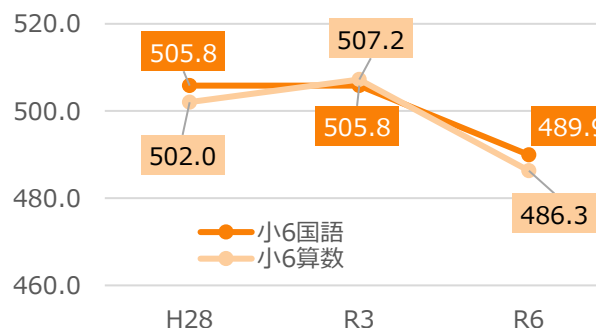
(1) 国全体のスコアの推移（基準年との比較）

- ・ 小学校国語・算数、中学校国語・英語については、本調査のスコアの低下が見られた。
- ・ 中学校数学については、本調査のスコアの変化は見られなかった。

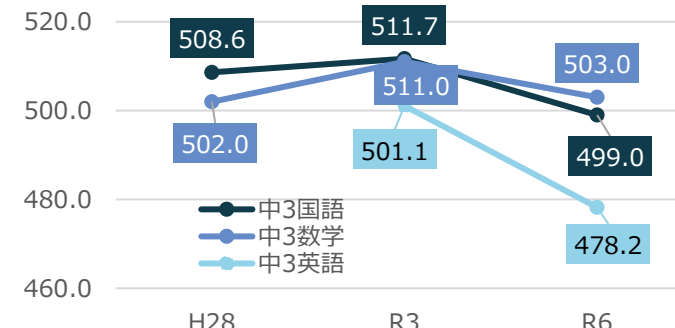
(2) 社会経済的背景（SES）とスコア

- ・ SESが低い層の方がスコアの低下が大きい状況が確認された（中学校英語を除く）。

平均スコアの推移（小学校）

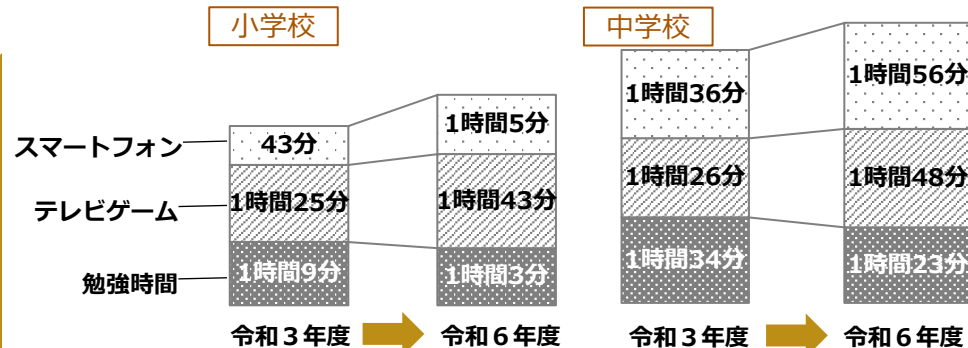


平均スコアの推移（中学校）



児童生徒の学校外での過ごし方

子供の学校外での平均的な過ごし方（平日）



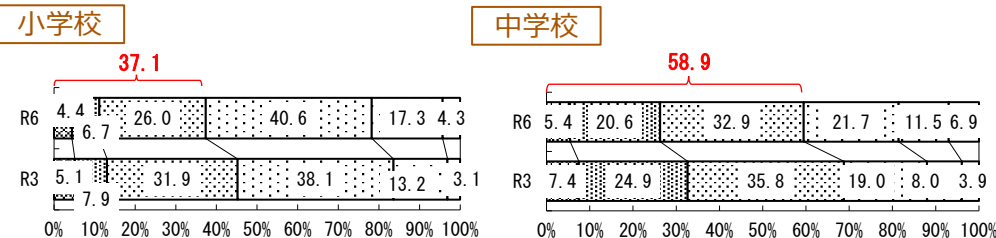
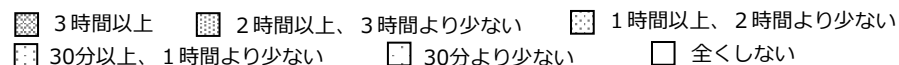
また、SESが低いグループほど、勉強時間が短く、テレビゲーム・スマートフォンの使用時間が長い。

(注) グラフの時間は令和3・6年度「保護者に対する調査」の以下の質問の各選択肢の中央値を基に、平均値を算出。

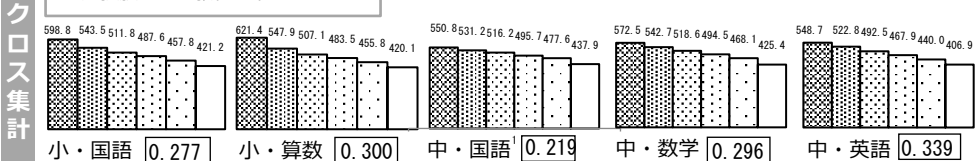
- ・お父さんは、学校の授業時間以外に、普段（学校のある日）、1日当たりどのくらいの時間、勉強しますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、ICT機器を活用してインターネットのコンテンツから学ぶ時間も含む）。
- ・お父さんは、普段（学校のある日）、1日のうち何時間程度、テレビゲーム（コンピュータゲーム・携帯式ゲーム・スマートフォンなどのゲームを含む）をしていますか。
- ・お父さんは、普段（学校のある日）、1日のうち何時間程度、携帯電話やスマートフォンを使っていますか。

- ◆ 学校外での勉強時間は前回調査から減少。学校外での勉強時間が長いほど、経年変化分析調査のスコアが高い傾向。

子供の平日の勉強時間



選択肢ごとの教科の平均スコア



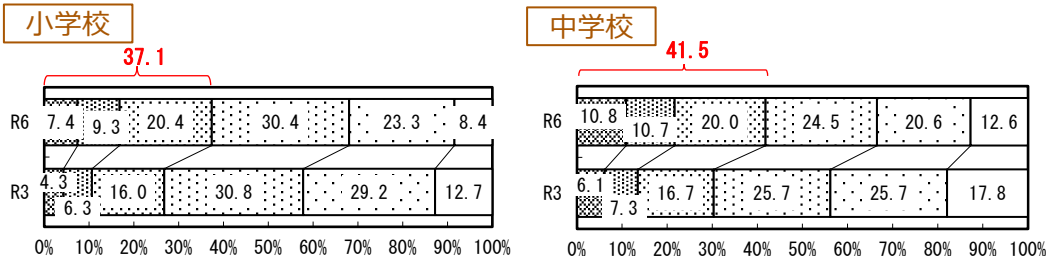
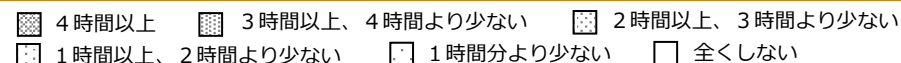
※掲載している割合を示すグラフは誤記入、無回答を除いているため、合計しても100%に満たない場合がある。

※ 内の数字は相関係数

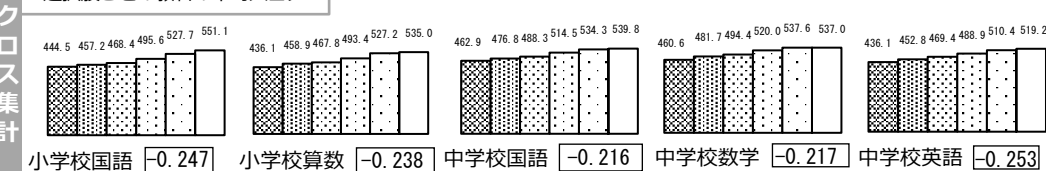
(注) 過去の保護者に対する調査結果と厳密に比較する際には、抽出対象となる母集団の違いや回収率等を考慮した分析が必要。

- ◆ テレビゲームの使用時間は前回調査から増加。テレビゲームの使用時間が長いほど、経年変化分析調査のスコアが低い傾向。

子供の1日のテレビゲームの時間

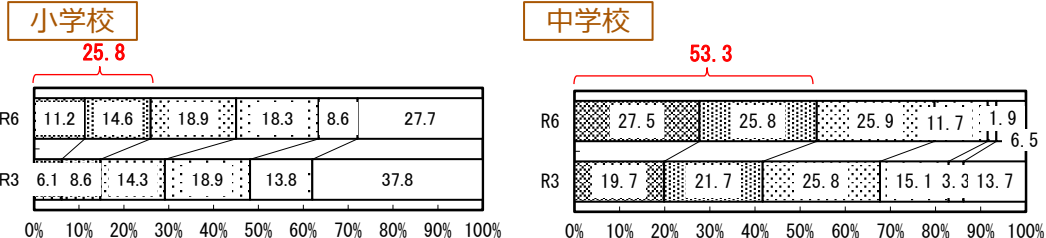
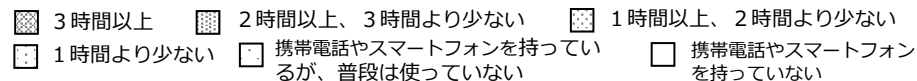


選択肢ごとの教科の平均スコア

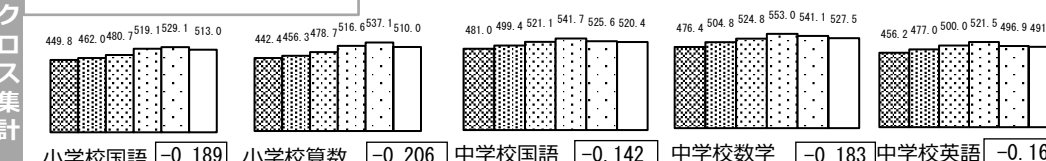


- ◆ スマートフォンの使用時間も前回調査から増加。スマートフォンの使用時間が一定程度を超えると、経年変化分析調査のスコアは低下。

子供の1日の携帯電話・スマートフォンの時間



選択肢ごとの教科の平均スコア



3 保護者に対する調査の結果 - 2

※掲載している割合を示すグラフは誤記入、無回答を除いているため、合計しても100%に満たない場合がある。

※ 内の数字は相関係数

R6経年・保護者

学校外での過ごし方に影響を与えるもの

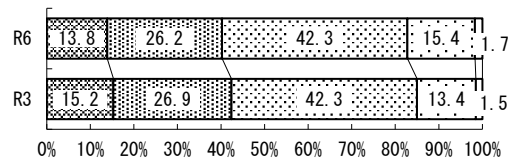
- ◆ 子供と勉強の話をする保護者の割合は減少（そのような保護者の子供の方が勉強時間が長い。）。
- ◆ 学校生活が楽しければ、良い成績を取ることはこだわらない保護者の割合は増加（そのような保護者の子供の方が勉強時間が短い。）。

普段（学校のある日）、お子さんと学校の勉強のことについて話をしていますか。

いつもしている
 よくしている
 ときどきしている
 あまりしていない
 全くしていない

小学校

※中学校でも同様の傾向。

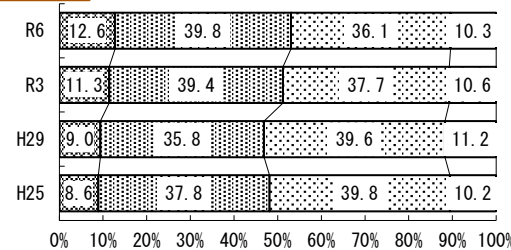


学校生活が楽しければ、良い成績をとることはこだわらないと考えますか。

あてはまる
 どちらかといえば、あてはまる
 どちらかといえば、あてはまらない
 あてはまらない

中学校

※小学校でも同様の傾向。



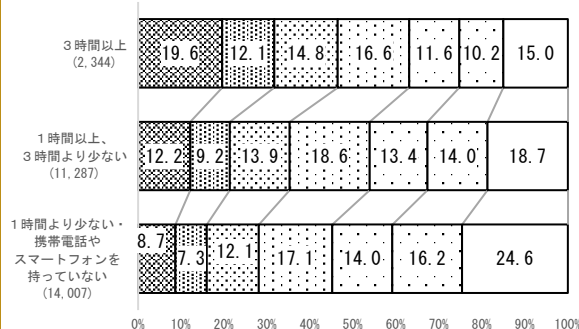
- ◆ テレビゲーム、SNS・動画視聴の保護者の使用時間が長いと、子供の使用時間もそれぞれ長い。
- ◆ 「ゲームの時間を限定している」保護者の子供の方が、テレビゲームの時間が短い。
- ◆ 「スマホルールを守るよう促す」保護者の子供の方が、SNSや動画視聴の時間が短い。

子供のSNS・動画視聴の時間

4時間以上
 3時間以上、4時間より少ない
 2時間以上、3時間より少ない
 1時間以上、2時間より少ない
 30分以上、1時間より少ない
 30分より少ない

小学校

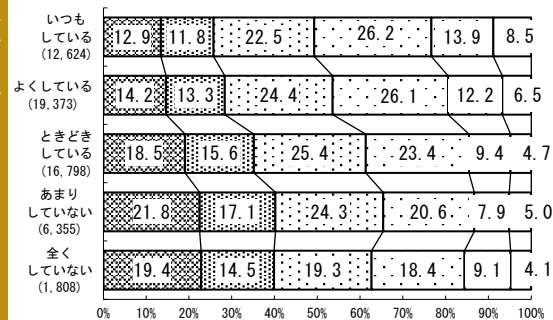
※中学校でも同様の傾向。



スマホルールを守るよう促す

中学校

※小学校でも同様の傾向。



保護者のSNS・動画視聴の時間

(注) 過去の保護者に対する調査結果と厳密に比較する際には、抽出対象となる母集団の違いや回収率等を考慮した分析が必要。

- ◆ 授業が「よく分かる」と回答している児童生徒の方が勉強時間が長く、テレビゲーム、SNS・動画等の時間が短い。

小学校

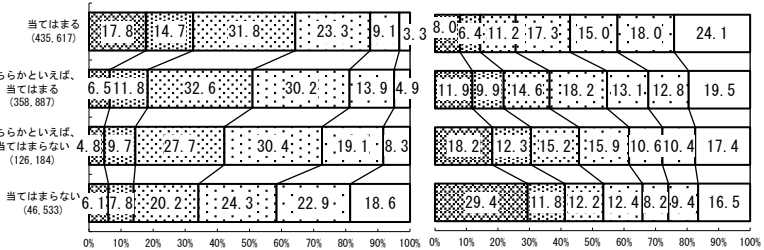
平日の勉強時間

3時間以上
 2時間以上、3時間より少ない
 1時間以上、2時間より少ない
 30分以上、1時間より少ない
 30分より少ない
 全くしない

SNS・動画視聴

4時間以上
 3時間以上、4時間より少ない
 2時間以上、3時間より少ない
 1時間以上、2時間より少ない
 30分以上、1時間より少ない
 30分より少ない
 携帯電話やスマートフォンを持っていない

算数の授業よく分かる



- ◆ 授業がよく分かる場合も分からない場合も、家で保護者と勉強の話をする児童生徒の勉強時間が長い。

平日の勉強時間

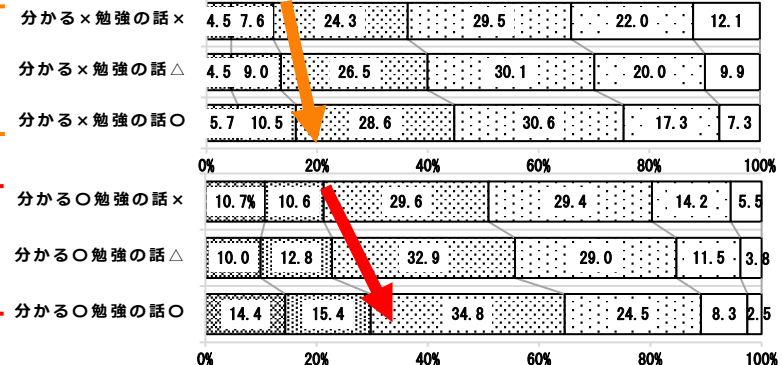
3時間以上
 2時間以上、3時間より少ない
 1時間以上、2時間より少ない
 30分以上、1時間より少ない
 30分より少ない
 全くしない

三重クロス集計

[算数の授業よく分かる] × [勉強の話] × [平日の勉強時間]

小学校

分かる
分からない
分かる



1 調査結果を活用した追加分析等、次回調査の検討

○ 令和6年度経年変化分析調査・保護者調査の結果を活用した追加分析

- 今回の調査から明らかになった課題について、大学等の研究機関等の専門的な知見を活用して高度な分析を行う。分析内容は以下のとおり。

経年変化分析調査でのスコアの低下傾向について、児童生徒の状況、家庭の社会経済的背景（SES（Socio-Economic Status））を含む家庭の状況、学校の状況の変化等から要因を探る。また、広く社会変化の影響をとらえる手法について検討する。

○ 集計結果データの貸与

- 大学等の研究者による多様な学術研究の分析等を促進するため、集計結果データ等の貸与を実施。

○ 次回令和9年度調査の設計の検討

- 令和9年度はCBT方式を基本として計画しているが、調査方式の違いによる解答への影響（モードエフェクト）等も踏まえて、令和6年度からの経年変化を適切に分析するための調査方式について更に検討する。
- モードエフェクトの分析等から得た知見を生かし、悉皆調査等の問題作成を進める。

2 学習指導要領の着実な実施・改訂に向けた検討

○ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- 学習指導要領の趣旨・内容の周知・徹底のため、全国の都道府県等教育委員会の指導主事を対象とした協議会を実施。
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた全国の授業づくりの好事例の収集・分析を行い、サポートマガジン「みるみる」として公表。引き続き、事例の普及に取り組む。

○ 学習指導の充実

- 今回明らかになった課題の解決に資するデジタル技術の活用方法について発信を実施。
- 英語において、科学的知見に基づいた実践的なオンライン研修や、英語を学ぶ動機付けの強化等の観点から、AIを活用した英語教育の実証事業を実施。
- 小学生等に学校外での自身の興味・関心に沿った楽しく利用できる学習コンテンツについて周知（「たのしくまなび隊」など）

○ 次期学習指導要領に向けた中央教育審議会における検討

- 経済的に困難な背景のある子供たちを含め、子供たち一人一人が必要な資質・能力を育成できるよう、各教科等の改善や柔軟な教育課程編成の在り方について、次期学習指導要領に向けた検討を行う。

3 児童生徒の学習習慣・生活習慣の確立

○ 学習支援

- 小学生等に学校外での自身の興味・関心に沿った楽しく利用できる学習コンテンツについて周知（「たのしくまなび隊」など）【再掲】
- 教員OBや大学生などの地域住民の協力を得て行う、中学生・高校生等を対象とした放課後等の学習支援活動（地域未来塾）について補助を実施。

○ テレビゲームやスマートフォンの使用

- 文部科学省情報モラルポータルサイトにおいて、児童生徒向けの情報モラルに関する動画教材を提供するとともに、教職員等を対象としたオンライン研修会を開催。
- こども家庭庁をはじめとした関係省庁と連携し、青少年インターネット環境整備基本計画（第6次）に基づき、利用時間に関する「親子のルールづくり」の推奨など、青少年のインターネットの適切な利用に関する教育・啓発活動等を推進。
- 児童生徒等の基本的な生活習慣（スマートフォンの使用を含む。）に関する調査研究を実施。

4 保護者の支援

○ 家庭教育の支援

- 地域の子育て経験者等により組織される「家庭教育支援チーム」の活動に対する支援を充実させることなどにより、保護者に寄り添う家庭教育支援の推進を図る。

○ 保護者からの相談対応や支援機関への働き掛け

- 様々な課題を抱える児童生徒のニーズを把握し、支援を展開するとともに、保護者からの相談対応や支援機関への働き掛けなどを行うスクールソーシャルワーカーの配置拡充。

○ 調査結果に関する周知・広報

- こども家庭庁と連携して、今回の経年変化分析調査・保護者に対する調査から明らかになった知見を、保護者や地域で子育て支援に関わる者に対して周知。

5 教師を取り巻く環境整備

○ きめ細かな指導体制の整備

- 中学校35人学級化（令和8年度から）や、小学校高学年及び中学年での教科担任制の拡充、中学校生徒指導担当教師の配置拡充、貧困など個々の学校が抱える課題への対応等、学校の指導・運営体制の充実。

○ 子供と向き合う時間の確保

- 教師が教師でなければできない仕事に集中できるよう、学校における働き方改革の更なる加速化や、教員業務支援員などの支援スタッフの配置充実。

參考資料

「社会経済的背景（SES）」×「正答数・スコア」の関係

○今回の調査でも、家庭の社会経済的背景(SES: Socio-Economic Status)*が低いグループほど、各教科の正答率が低い傾向が見られる。SES別に各教科の平均正答数・スコア、中央値、最頻値、標準偏差を確認したところ、小学校算数と中学校数学についてはSESにより差が見られた。

*本調査では、児童生徒質問調査〔22〕「家にある本の冊数」をSESの代替指標として利用

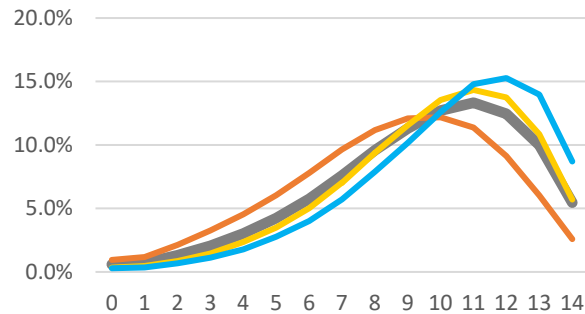
— 全体

— 0～25冊

— 26～100冊

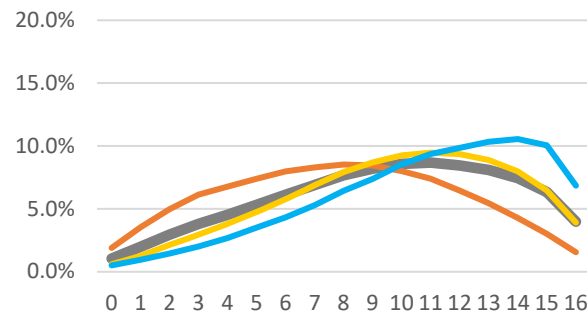
— 101冊以上

小学校国語



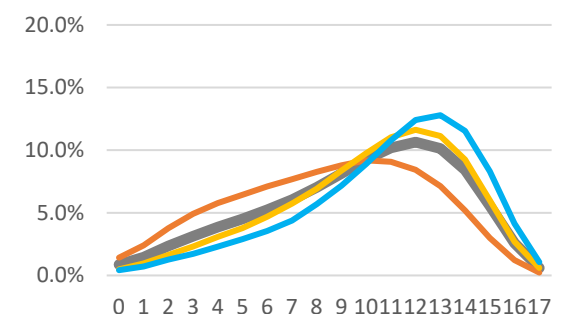
	平均正答数	中央値	最頻値	標準偏差
0～25冊(33.4万人)	8.5	9	10	3.1
26～100冊(29.8万人)	9.7	10	11	2.8
101冊以上(29.1万人)	10.2	11	12	2.8
全国（国公私）	9.4	10	11	3.0

小学校算数



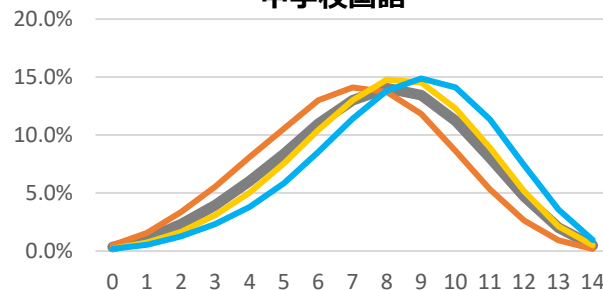
	平均正答数	中央値	最頻値	標準偏差
(33.4万人)	7.9	8	8	4.0
(29.8万人)	9.7	10	11	3.8
(29.1万人)	10.7	11	14	3.8
	9.3	10	11	4.0

小学校理科



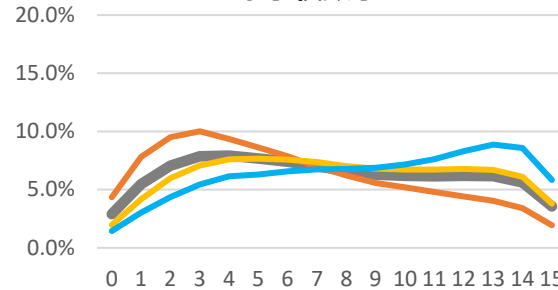
	平均正答数	中央値	最頻値	標準偏差
(33.4万人)	8.5	9	10	3.9
(29.8万人)	10.2	11	12	3.6
(29.1万人)	10.9	12	13	3.5
	9.7	10	12	3.8

中学校国語



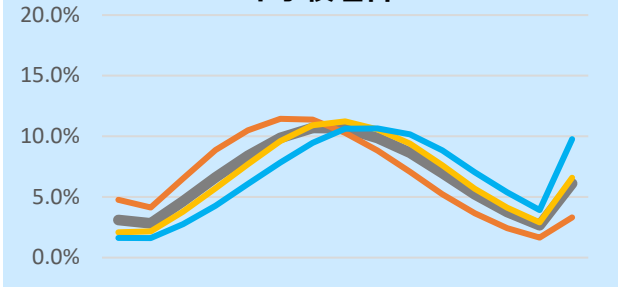
	平均正答数	中央値	最頻値	標準偏差
0～25冊(33.6万人)	6.9	7	7	2.7
26～100冊(27.1万人)	7.9	8	8	2.6
101冊以上(24.4万人)	8.4	9	9	2.6
全国（国公私）	7.7	8	8	2.7

中学校数学



	平均正答数	中央値	最頻値	標準偏差
(33.6万人)	6.2	6	3	4.0
(27.1万人)	7.7	8	5	4.1
(24.4万人)	8.6	9	13	4.2
	7.4	7	4	4.2

中学校理科



	平均スコア	中央値	最頻値	標準偏差
(34.1万人)	473	465	—	115
(27.3万人)	516	506	—	121
(24.5万人)	541	531	—	130
	505	496	—	124

「社会経済的背景（SES）」×「主体的・対話的で深い学び」×「正答率」の関係

三重クロス集計

家庭の社会経済的背景(SES: Socio-Economic Status)*が低いグループほど、各教科の正答率が低い傾向が見られる中でも、「主体的・対話的で深い学び」(※)に取り組んだ児童生徒は、SESが低い状況にあっても、各教科の正答率が高い傾向が見られる。

(※)「児童生徒〔32〕課題の解決に向けて自分から取り組んだか」以外の「主体的・対話的で深い学び」に関する回答でも同様の傾向。

【家にある本の冊数】×【課題の解決に向けて自分から取り組んだ】×【各教科の正答率】

[授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。 児童生徒〔32〕]



- ① 当てはまる
- ② どちらかといえば、当てはまる
- ③ どちらかといえば、当てはまらない
- ④ 当てはまらない



[家にある本の冊数
児童生徒〔22〕]



- ・ 0～25冊
- ・ 26～100冊
- ・ 101冊以上

*SESの代替指標として利用

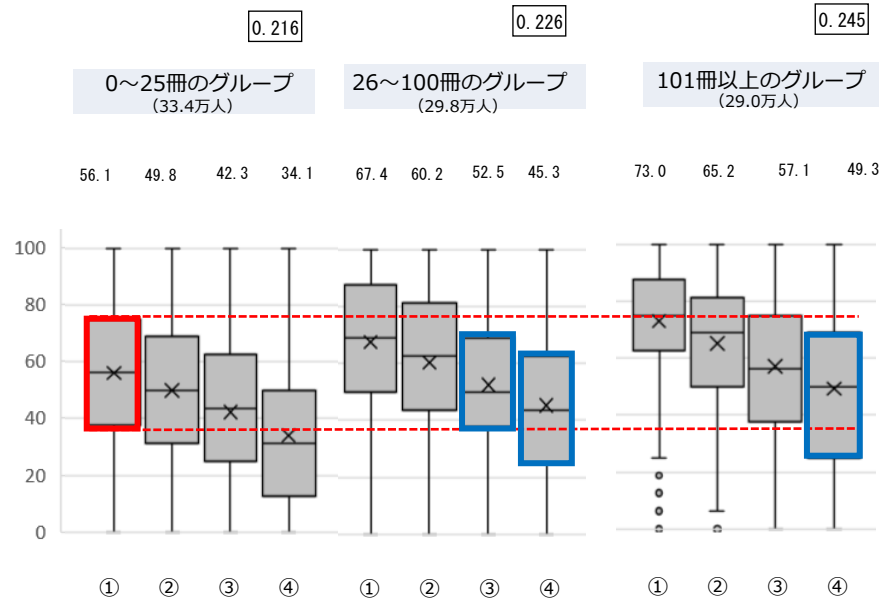
分析

例えば、中学校数学では、低SESグループ（本が0～25冊）で主体的・対話的で深い学びの質問に「①」と回答した生徒の箱ひげ図の箱は、中SESグループ（本が26～100冊）で「②」「③」「④」と回答した生徒及び高SESグループ（本が101冊以上）で「③」「④」と回答した生徒の箱より上の位置（正答率が高い位置）にある。

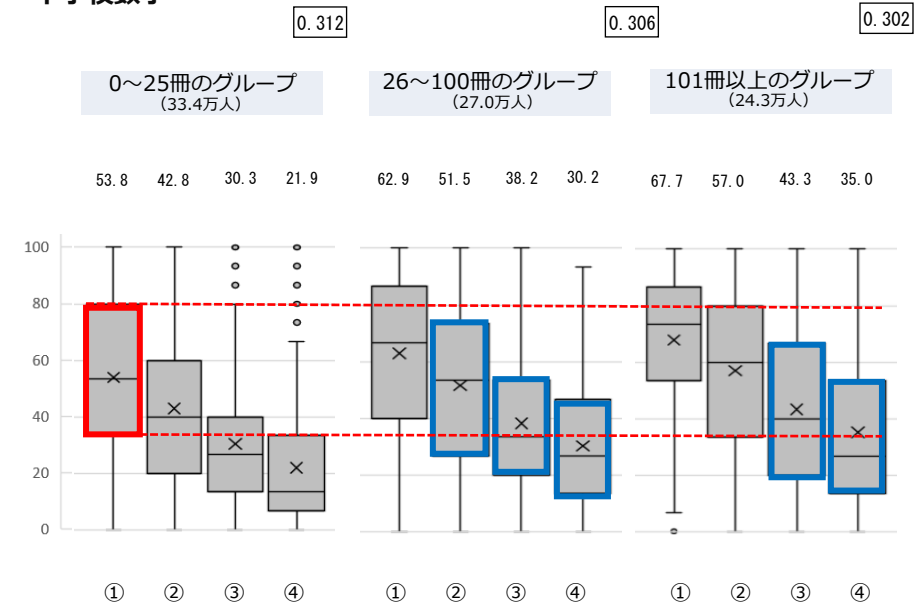


「各教科の正答率」

小学校算数



中学校数学



(注) 中・高SESグループの箱ひげ図のうち、低SESグループで「①」と回答した児童生徒の箱ひげ図の箱（赤枠）の第1四分位又は第3四分位を下回っているものの箱に青枠を付している。

(参考) SESと正答率との関係等については、令和4年度文部科学省委託研究（受託者：福岡教育大学、お茶の水女子大学）においても詳細に分析を行っている。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1416304_00008.html



「文字式・証明を読んで理解できること」×「数学で説明する活動」×「中学校数学正答率」の関係

三重クロス集計

- 今年度の調査においては、「文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができるか」という生徒質問項目と、数学の正答率の間にも高い相関があることが確認された（P.68）。また、現行の学習指導要領においては、算数・数学の授業で「どのように考えたのかについて説明する活動」が重視されており、このような活動を行っている児童生徒ほど算数・数学の正答率が高い傾向が見られる。
- 文字式・証明を読んで理解できること、数学で説明する活動の実施状況について分析したところ、両方に肯定的に回答したグループ（理解○説明○）の中学校数学の正答率は、他のグループより高かった。

【文字式・証明を読んで理解できること】×【数学で説明する活動】×【中学校数学正答率】

【文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができますか。生徒〔59〕（新規）】

- 当てはまる（又は）どちらかといえば、当てはまる
- × どちらかといえば、当てはまらない（又は）当てはまらない

【数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。生徒〔58〕】

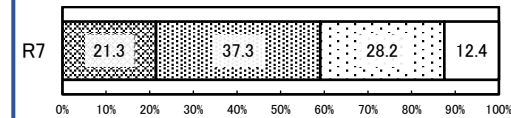
- 当てはまる（又は）どちらかといえば、当てはまる
- × どちらかといえば、当てはまらない（又は）当てはまらない

生徒〔58〕

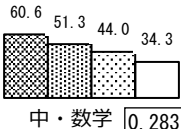
数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。

- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない

中学校



選択肢ごとの教科の平均正答率



中・数学 [0.283]

分析

中学校数学では、

- ・読んで理解できること
- ・数学で説明する活動を行っていること

の両方に肯定的に回答したグループ（理解○説明○）の正答率を表す箱ひげ図の箱が最も上の位置（正答率が高い位置）にあり、いずれにも否定的に回答したグループ（理解×説明×）の箱が最も下の位置にある。

分析

読んで理解できること、数学で説明する活動を行っていることの両方に肯定的に回答したグループ（理解○説明○）の正答率が他のグループより高いという傾向は、家庭の社会的経済的背景（SES: Socio-Economic Status）*別に見ても確認できる。

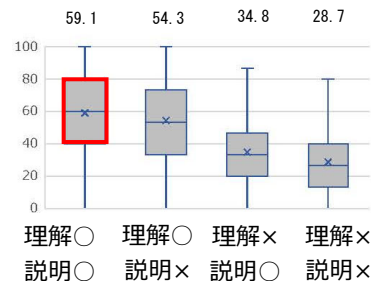
*全国学力・学習状況調査では、児童生徒質問調査での「家にある本の冊数」（生徒〔22〕）をSESの代替指標として利用している。

「中学校数学の正答率」

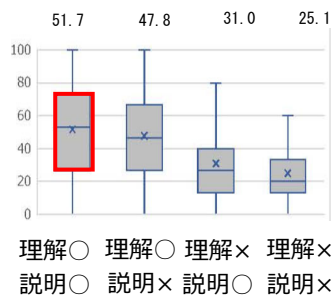
グループ	人数（万人）
	中学校
理解○説明○	43.2
理解○説明×	17.5
理解×説明○	9.6
理解×説明×	19.0

中学校数学

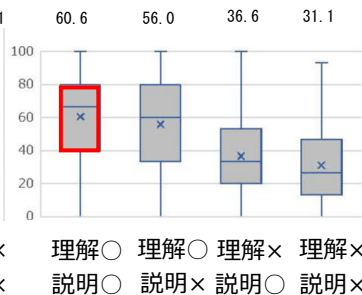
[0.441]



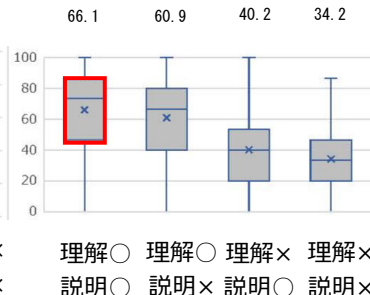
[0.422]

0～25冊のグループ
(33.2万人)

[0.429]

26～100冊のグループ
(26.8万人)

[0.437]

101冊以上のグループ
(24.1万人)

② 主体的な学習の調整

ポイント

- 【p.52】小・中学校ともに、約7～8割の児童生徒が主体的に学習を調整できている。
- 【p.52】主体的に学習を調整できていると考える児童生徒の方が、各教科の正答率・スコアが高い。

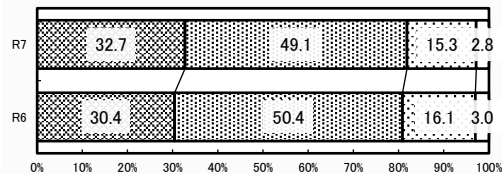
自分で学び方を考え、工夫

児童〔16〕 生徒〔16〕 分からないことやくわ〔詳〕しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。

☒ できている ☒ どちらかといえば、できている
☒ どちらかといえば、できていない ☐ できていない

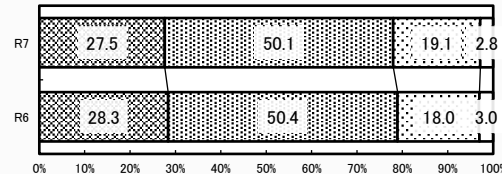
小学校

81.8



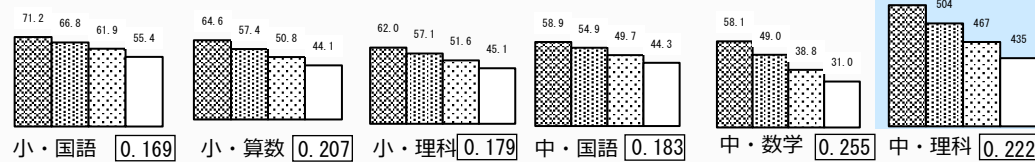
中学校

77.6



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

クロス集計



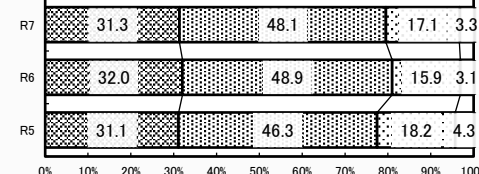
よく分からなかった点等を見直し次の学習につなげた

児童〔36〕 生徒〔36〕 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。

☒ 当てはまる ☒ どちらかといえば、当てはまる
☒ どちらかといえば、当てはまらない ☐ 当てはまらない

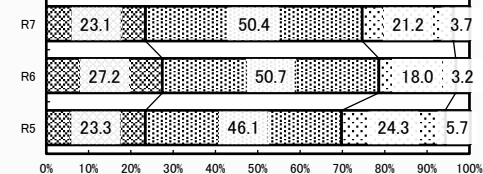
小学校

79.4



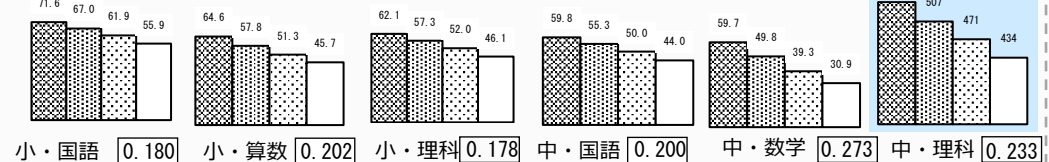
中学校

73.5



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

クロス集計



3. 質問調査結果（児童生徒、学校）

※ 内の数字は相関係数

R7

(2) ICTを活用した学習状況

① ICTの活用状況等

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要） p. 53

ポイント

- 【p.53】 ICT機器を「ほぼ毎日」「週3回以上」活用する学校は、小学校97%（前年比3ポイント増）、中学校94%（前年比4ポイント増）。また、児童生徒のICT機器を使用する頻度と各教科の正答率・スコアとの間に、一定の関係が見られる。
- 【p.54】 ICT機器が、不登校児童生徒、特別な支援を要する児童生徒、外国人児童生徒等に対する学習活動等の支援や、児童生徒の心身の状況の把握等にも活用されている。

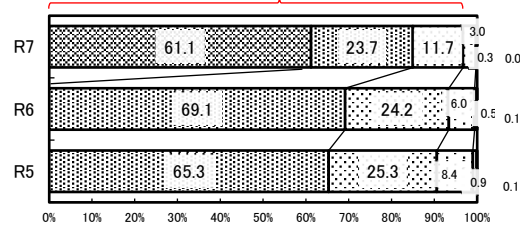
小学校〔58〕
中学校〔58〕

調査対象学年の児童〔生徒〕に対して、前年度までに、児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。

ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
 週3回以上
 週1回以上
 月1回以上
 月1回未満

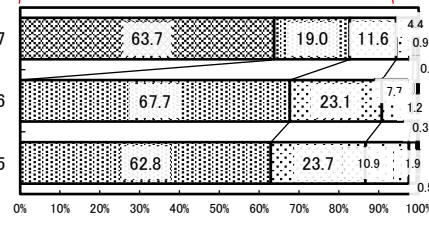
小学校

96.5



中学校

94.3



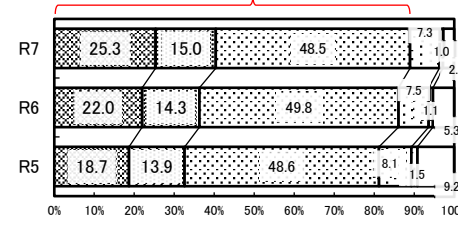
小学校〔66〕
中学校〔66〕

児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどの端末を、どの程度家庭で利用できるようにしていますか。

毎日持ち帰って、毎日利用させている
 毎日持ち帰って、時々利用させている
 時々持ち帰って、時々利用させている
 持ち帰らせていない
 持ち帰ってはいいないこととしている
 臨時休業等の非常時のみ、持ち帰ることとしている

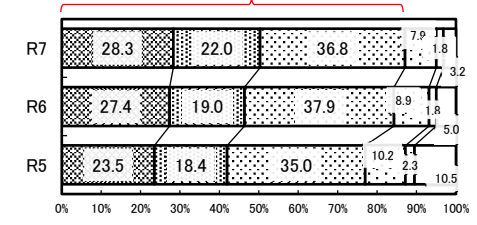
小学校

88.8



中学校

87.1



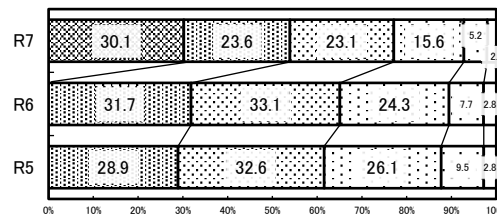
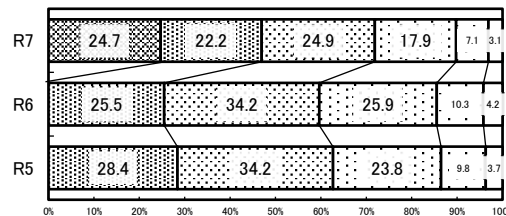
児童〔28〕
生徒〔28〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。

ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
 週3回以上
 週1回以上
 月1回以上
 月1回未満

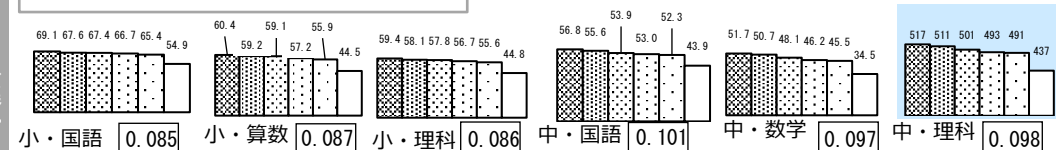
小学校

中学校



クロス集計

選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



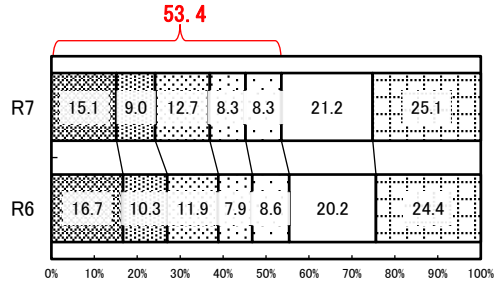
小学校〔67〕
中学校〔67〕

児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、以下のような用途でどの程度活用していますか。

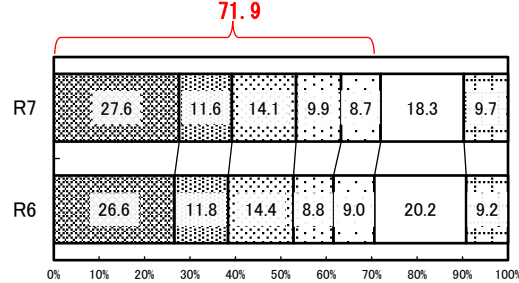
ほぼ毎日
 週3回以上
 週1回以上
 月1回以上
 月1回未満
 活用していない
 該当する児童〔生徒〕がない

(1) 不登校児童〔生徒〕に対する学習活動等の支援（授業配信を含む）

小学校

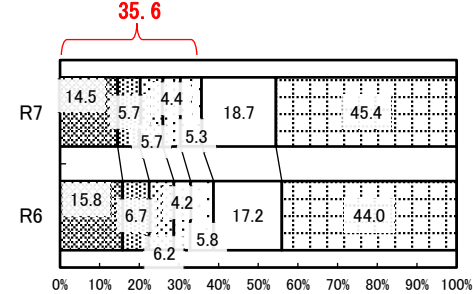


中学校

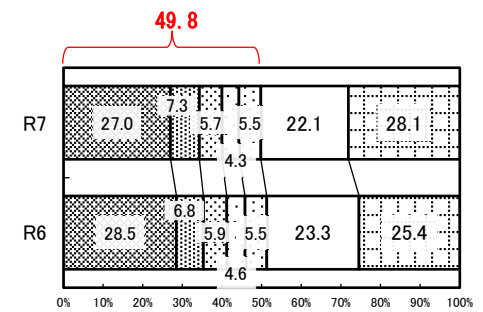


(2) 希望する不登校児童〔生徒〕に対する授業配信

小学校

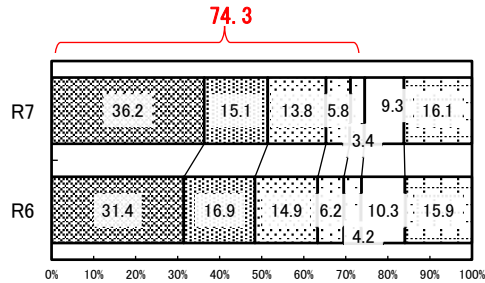


中学校

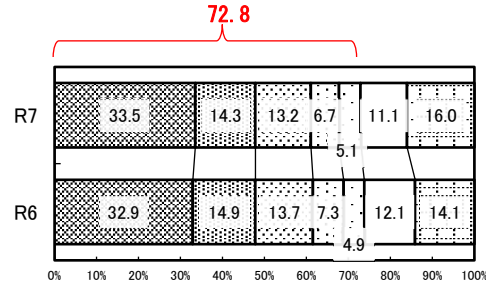


(3) 特別な支援を要する児童〔生徒〕に対する学習活動等の支援

小学校

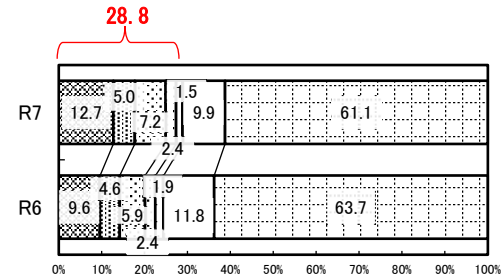


中学校

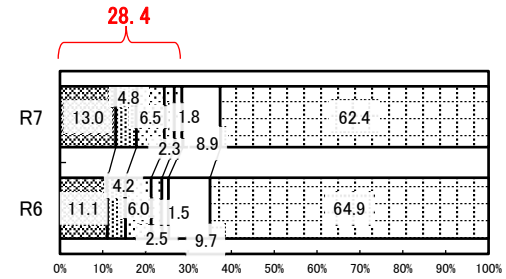


(4) 外国人児童〔生徒〕等に対する学習活動等の支援

小学校

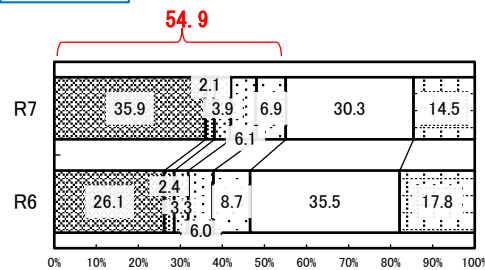


中学校

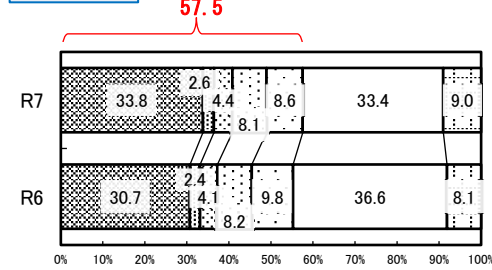


(5) 児童〔生徒〕の心身の状況の把握

小学校

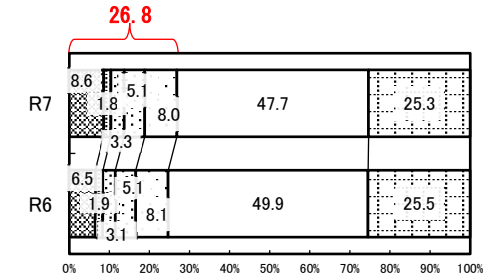


中学校

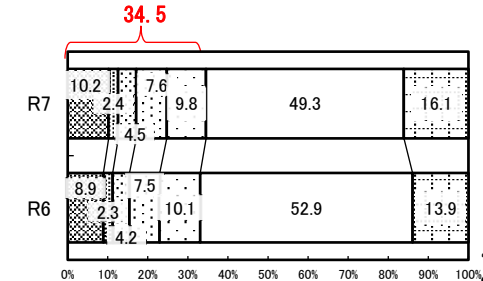


(6) 児童〔生徒〕に対するオンラインを活用した相談・支援

小学校



中学校



ポイント

- 【p.55】 約8割の児童生徒がICT機器で「文章を作成する（文字、コメントを書くなど）」ことができる、約9割の児童生徒が「インターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）」ことができると考えている。
- 【p.55】 ICT機器を活用ことができると考えている児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる。CBTで実施した中学校理科とPBTで実施した教科との間で、この傾向に大きな違いは見られない。

※同じ傾向はTIMSS2023（CBTで算数・数学、理科を実施）においても確認されている。

【参考】 TIMSS2023の結果（概要） <https://www.nier.go.jp/timss/2023/gaiyou.pdf>

児童〔29〕
生徒〔29〕

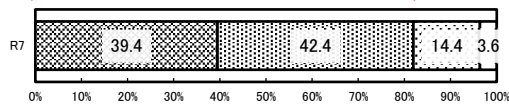
あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って以下のことができますか。（新規）

■ とてもそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない □ そう思わない

(1) 文章を作成する（文字、コメントを書くなど）

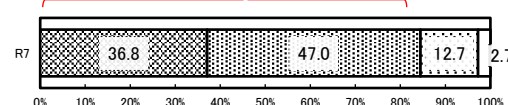
小学校

81.8



中学校

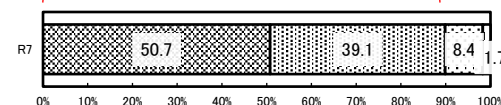
83.8



(2) インターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）

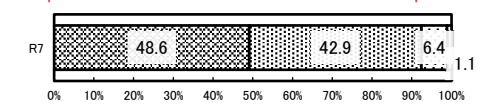
小学校

89.8

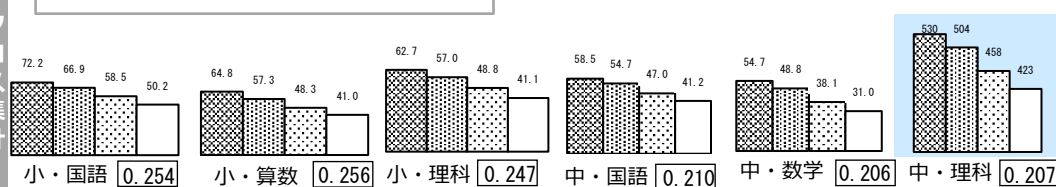


中学校

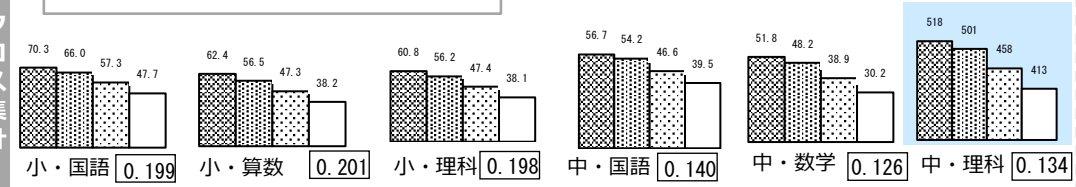
91.5



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



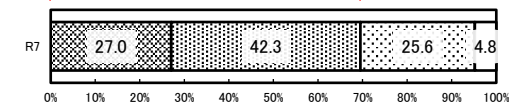
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



(3) 情報を整理する（図、表、グラフ・思考ツールなどを使ってまとめる）

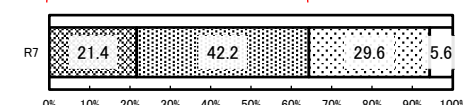
小学校

69.3

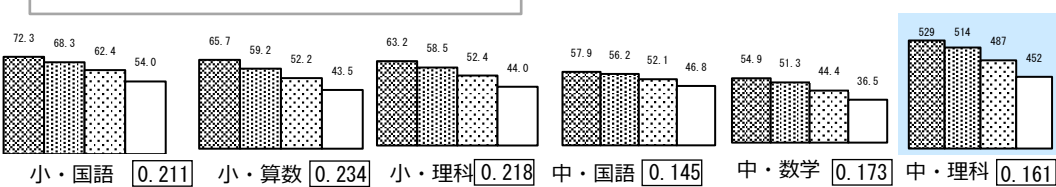


中学校

63.6



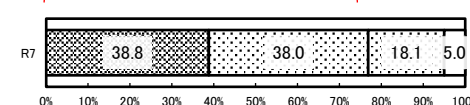
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



(4) 学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成する

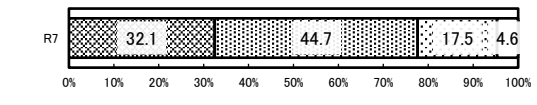
小学校

76.8

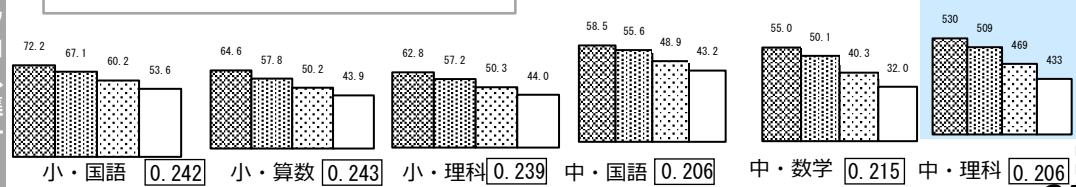


中学校

76.8



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



ICTを活用する自信×探究的な学び

- ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向が見られる。

クロス
集計

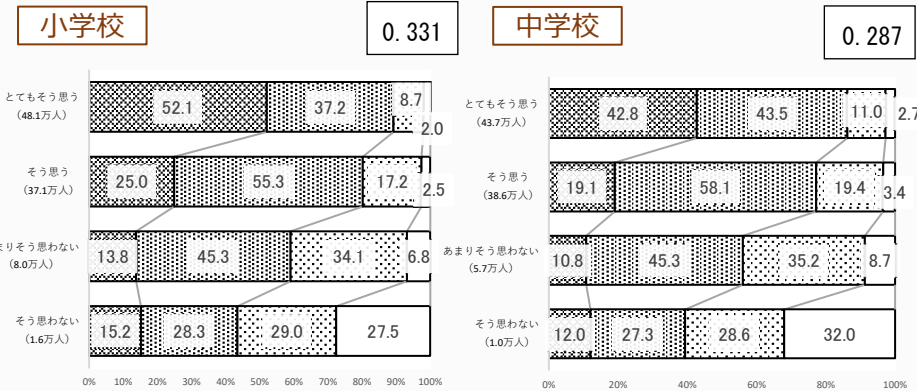
(児童生徒)

あなたは自分がインターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）ことができると思いますか。〔29-2〕

〔インターネットを使って情報を収集できる〕×
〔総合的な学習の時間で探究的な学びに取り組んでいた〕

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。〔40〕

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

クロス
集計

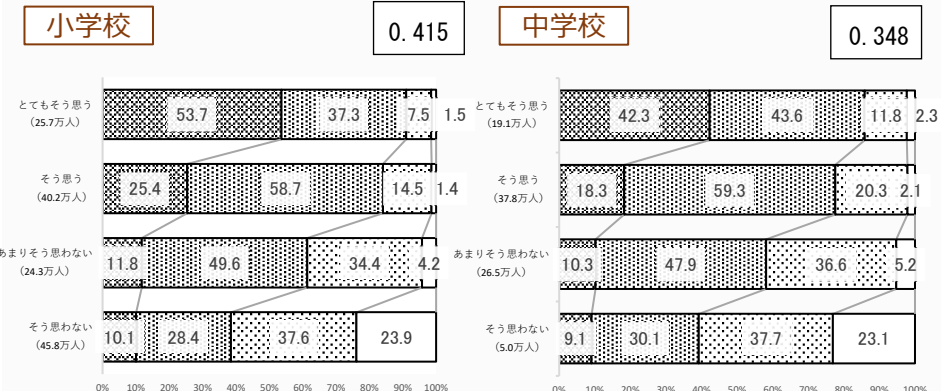
(児童生徒)

あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思いますか。〔29-3〕

〔ICT機器を使って情報を整理できる〕×
〔学んだことを生かしながら考えをまとめていた〕

授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。〔33〕

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

クロス
集計

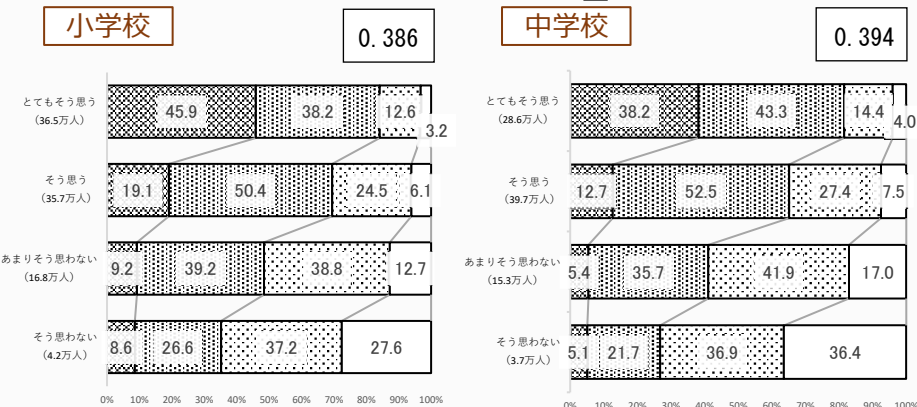
(児童生徒)

あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができると思いますか。〔29-4〕

〔ICT機器を使って学校のプレゼンテーションを作成できる〕×
〔授業で工夫して発表していた〕

授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。〔31〕

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない



参考

PISA2022では、情報を集める、集めた情報を記録する、分析する、報告するといった場面でデジタル・リソースを使う頻度は他国に比べて低く、「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標はOECD平均を下回っていた。

- 高校生自身が情報を集める、集めた情報を記録する、分析する、報告するといった場面でデジタル・リソースを使う頻度は他国に比べて低く、「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標はOECD平均を下回っている。

ICT活用調査「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標

OECD平均	0.01
29位 日本	-0.82

※ ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

【参考】 OECD生徒の学習到達度調査2022年調査（PISA2022）のポイント
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

ICTを活用する自信×各教科における学び

- ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、各教科で自分の考えを工夫してまとめたり発表したりする活動に取り組んでいた傾向が見られる。

クロス集計

【ICT機器を使って情報を整理することができると思う】× 【国語の授業で文章を工夫して書いている、整えている】

国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたりくわしく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いていますか。〔児童50〕

国語の授業で、文章を書いた後に、読み手の立場に立って読み直し、語句の選び方や使い方、文や段落の長さ、語順などが適切かどうかを確かめて文章を整えていますか。〔生徒51〕

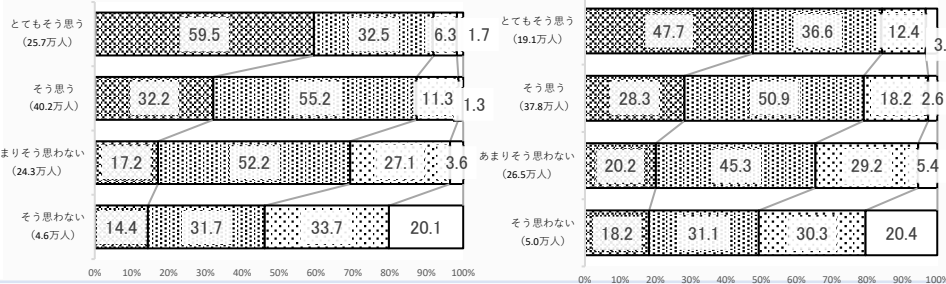
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.380

中学校

0.259



クロス集計

【ICT機器を使って学校のプレゼンテーションを作成することができる】× 【算数・数学の授業でどのように考えたのかを説明している】

算数〔数学〕の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。〔58〕

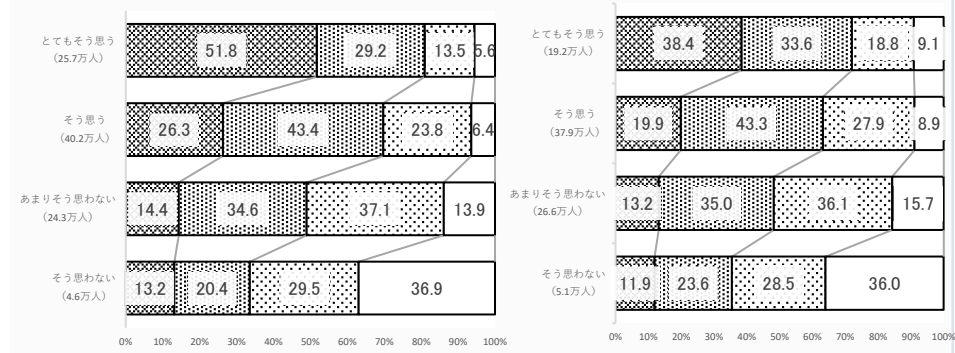
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.346

中学校

0.256



クロス集計

【ICT機器を使って情報を整理することができると思う】× 【理科の授業で観察や実験の結果を自分でまとめている*】

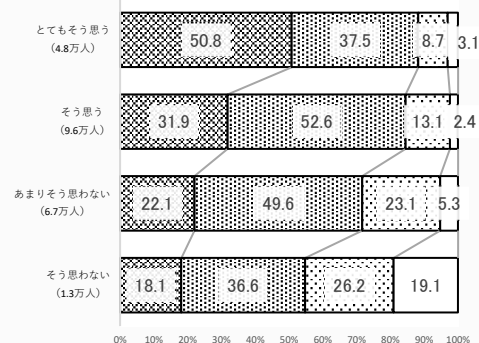
理科の授業では、観察や実験の結果を自分でまとめていますか。〔生徒71-2〕*

*ランダム方式で出題

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

中学校

0.266



クロス集計

【ICT機器を使って学校のプレゼンテーションを作成することができる】× 【英語「話すこと（発表）」*】

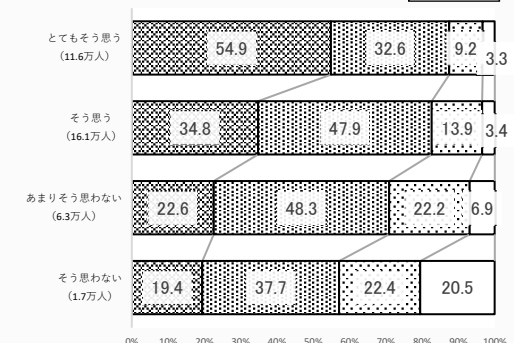
スピーチやプレゼンテーションなど、まとめた内容を英語で発表する活動が行われていたと思いますか。〔生徒72-4〕*

*ランダム方式で出題

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

中学校

0.265



ICTを活用する自信×「自分にはよいところがある」

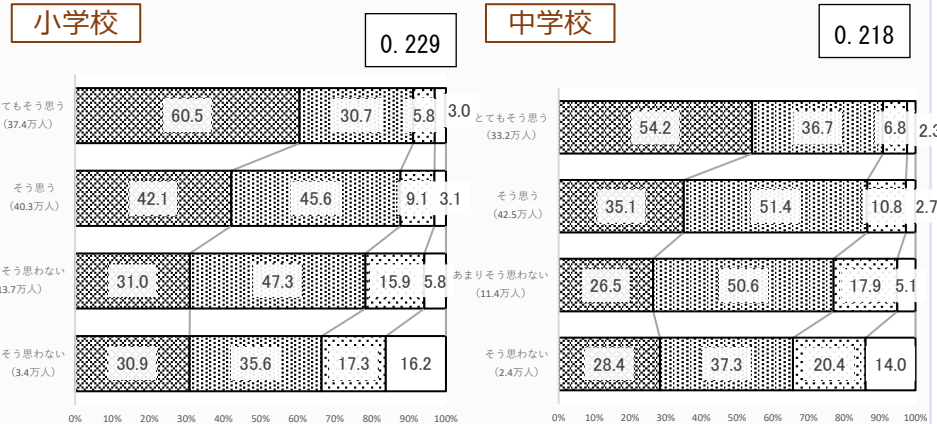
- ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、「自分にはよいところがあると思う」と回答している傾向が見られる

クロス集計 （児童生徒）

【ICT機器を使って文章を作成できる】× 【自分にはよいところがあると思う】

自分には、よいところがあると思いますか。〔5〕

☒ 当てはまる ☒ どちらかといえば、当てはまる
☒ どちらかといえば、当てはまらない ☐ 当てはまらない

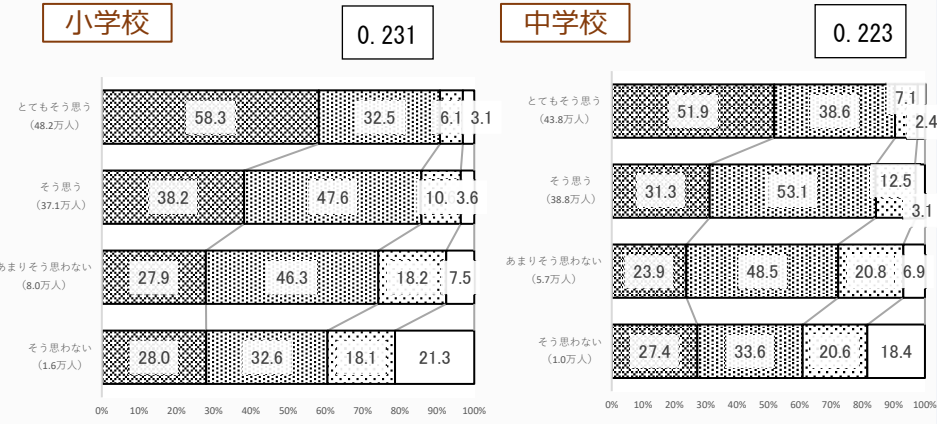


クロス集計 （児童生徒）

【インターネットを使って情報を収集できる】× 【自分にはよいところがあると思う】

自分には、よいところがあると思いますか。〔5〕

☒ 当てはまる ☒ どちらかといえば、当てはまる
☒ どちらかといえば、当てはまらない ☐ 当てはまらない

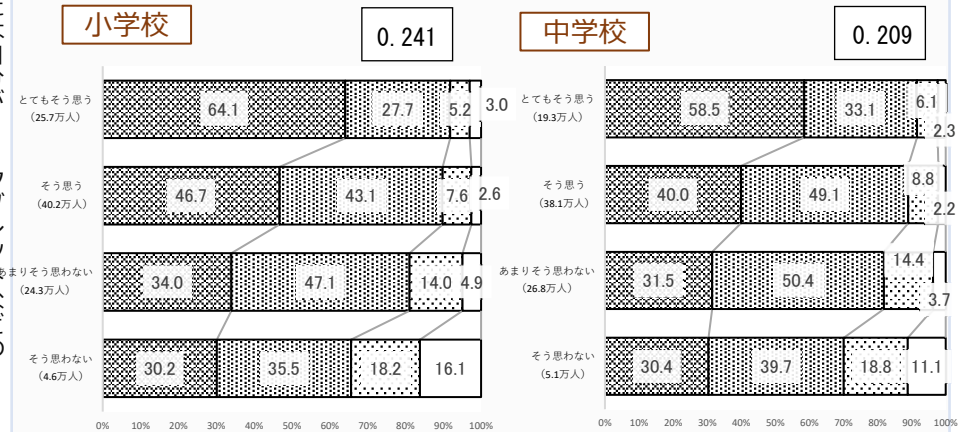


クロス集計 （児童生徒）

【ICT機器を使って情報を整理できる】× 【自分にはよいところがあると思う】

自分には、よいところがあると思いますか。〔5〕

☒ 当てはまる ☒ どちらかといえば、当てはまる
☒ どちらかといえば、当てはまらない ☐ 当てはまらない

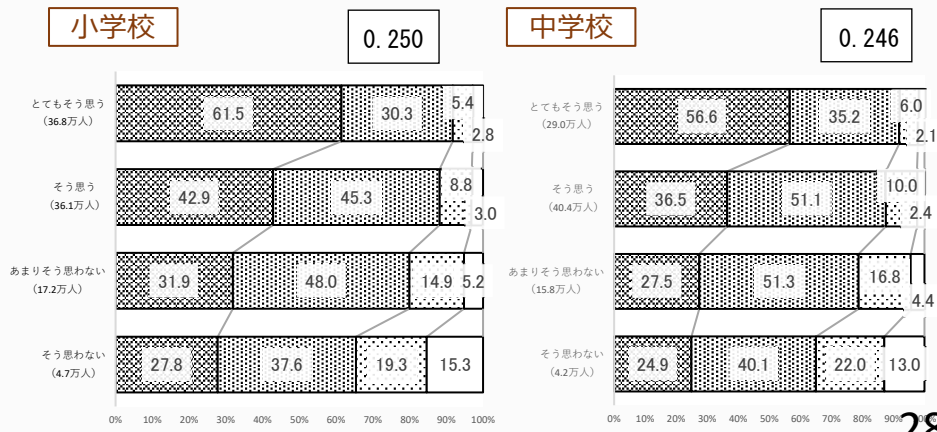


クロス集計 （児童生徒）

【ICT機器を使って学校のプレゼンテーションを作成できる】× 【自分にはよいところがあると思う】

自分には、よいところがあると思いますか。〔5〕

☒ 当てはまる ☒ どちらかといえば、当てはまる
☒ どちらかといえば、当てはまらない ☐ 当てはまらない



ポイント

- 【p.59】 約9割の児童生徒が、ICT機器は「分からないことがあった時に、すぐ調べることができる」「画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」と考えている。
- 【p.60】 ICT機器活用の効力感に関して肯定的に回答した児童生徒ほど、自分と違う意見や新たな考えについて考えることに前向きな傾向が見られる。

児童〔30〕
生徒〔30〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕の学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、以下のことはあなたにどれくらい当てはまりますか。

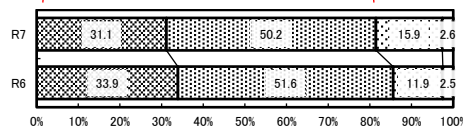
※中学校生徒質問調査では、7項目のうちランダムに選ばれた2項目に回答

■ とてもそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない □ そう思わない

(1) 自分のペースで理解しながら学習を進めることができる

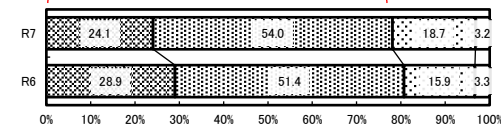
小学校

81.3



中学校

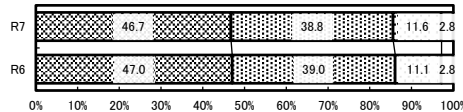
78.1



(3) 楽しみながら学習を進めることができる

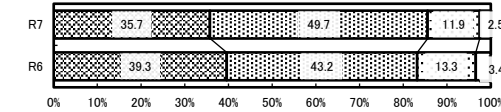
小学校

85.5



中学校

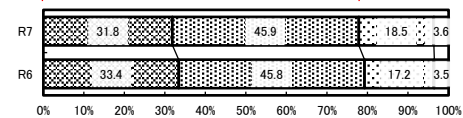
85.4



(5) 自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる

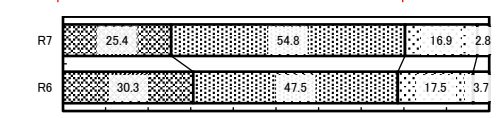
小学校

77.7



中学校

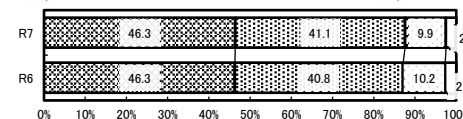
80.2



(7) 友達と協力しながら学習を進めることができる

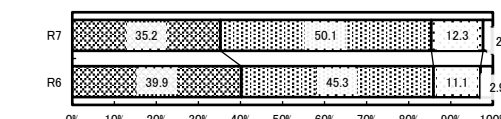
小学校

87.4



中学校

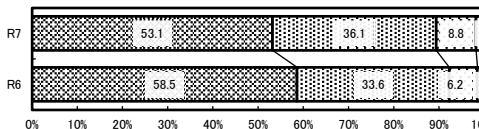
85.3



(2) 分からないことがあった時に、すぐ調べることができる

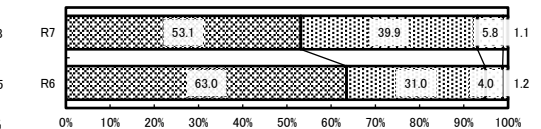
小学校

89.2



中学校

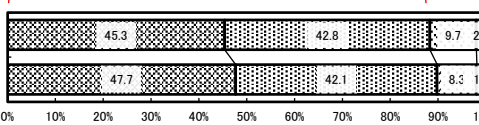
93.0



(4) 画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる

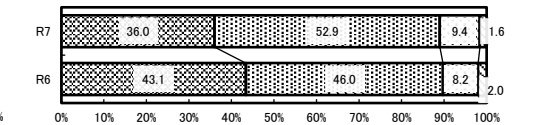
小学校

88.1



中学校

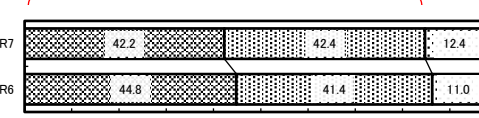
88.9



(6) 友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる

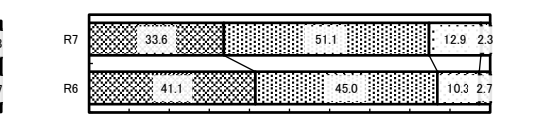
小学校

84.6



中学校

84.7



ICT機器活用の効力感×「自分と違う意見について考える」

○ ICT機器活用の効力感に関して肯定的に回答した児童生徒ほど、自分と違う意見や新たな考えについて考えることに前向きな傾向が見られる。

児童〔30〕
生徒〔30〕 5年生まで〔1、2年生のとき〕の学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、以下のことはあなたにどれくらい当てはまりますか。

クロス
集計

（児童生徒）

〔ICTを活用すると友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる〕×
〔自分と違う意見について考えるのは楽しい〕

自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。〔13〕

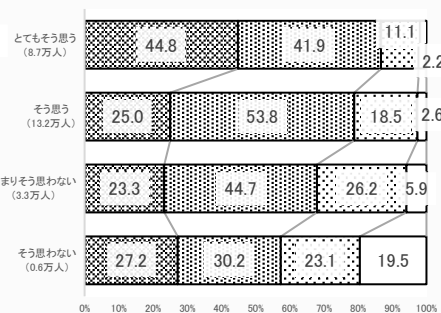
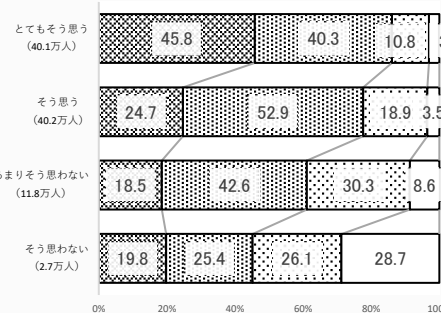
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.280

中学校

0.212



クロス
集計

（児童生徒）

〔ICTを活用すると友達と協力しながら学習を進められる〕×
〔自分と違う意見について考えるのは楽しい〕

自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。〔13〕

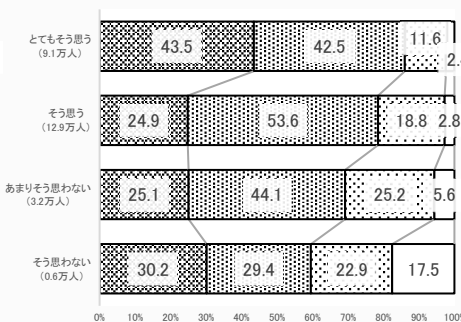
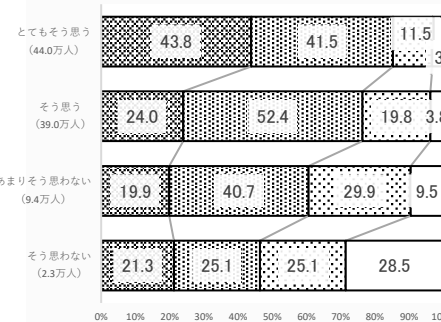
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.258

中学校

0.189



クロス
集計

（児童生徒）

〔ICTを活用すると自分の考えや意見を分かりやすく伝えられる〕×
〔話合いで考えを深めたり新たな考えに気付いたりした〕

学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。〔35〕

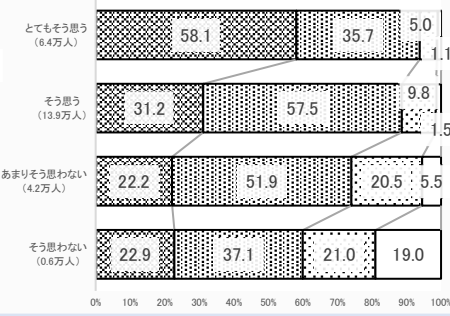
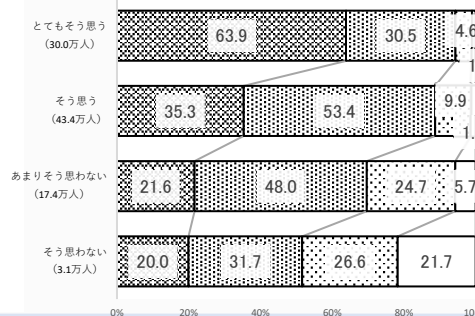
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.374

中学校

0.297



クロス
集計

（児童生徒）

〔ICTを活用すると友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる〕×
〔話合いで考えを深めたり新たな考えに気付いたりした〕

学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。〔35〕

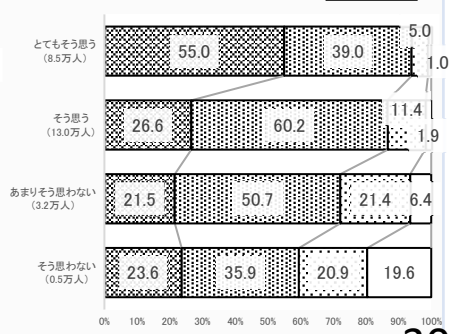
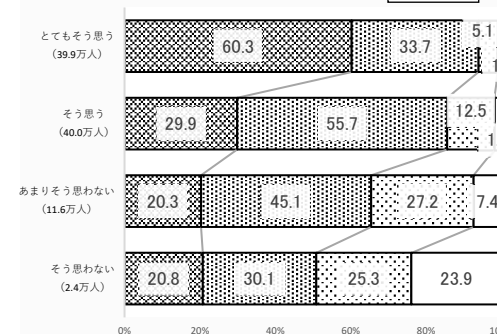
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校

0.375

中学校

0.307



3. 質問調査結果（児童生徒、学校）

※ 内の数字は相関係数

R7

(3) 教科に関する意識や学習活動 ① 各教科への興味・関心、理解度

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要） p. 62

ポイント

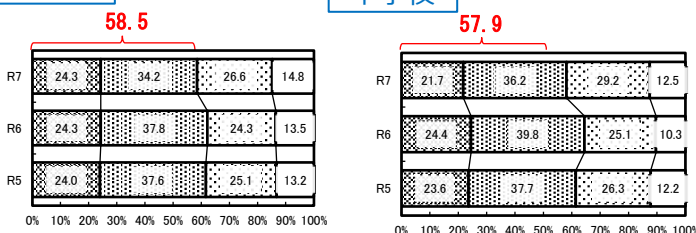
- 【p.63】授業がよく分かる児童生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られるが、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が全教科で前回調査から減少。
- 【p.63】国語、数学、理科をそれぞれ得意でないと考えている中学校生徒は約5割。

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない

児童〔45〕
生徒〔45〕 国語の勉強は好きですか。

小学校

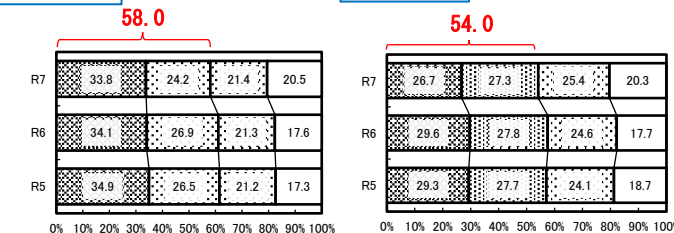
中学校



児童〔53〕
生徒〔53〕 算数〔数学〕の勉強は好きですか。

小学校

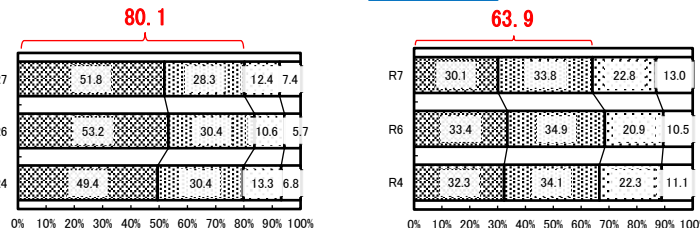
中学校



児童〔61〕
生徒〔61〕 理科の勉強は好きですか。

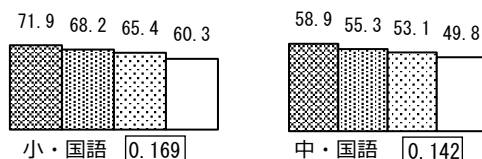
小学校

中学校



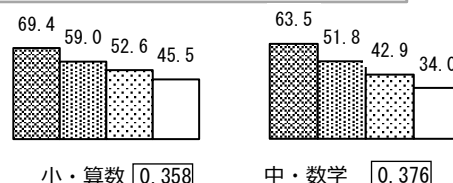
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

クロス集計



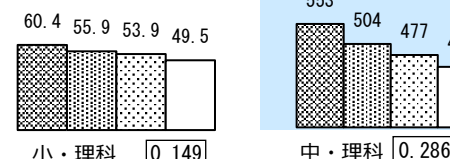
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

クロス集計



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

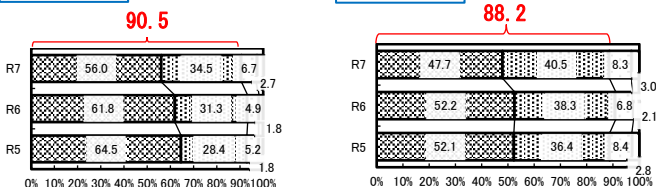
クロス集計



児童〔47〕
生徒〔47〕 国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。

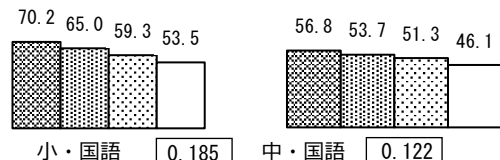
小学校

中学校



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

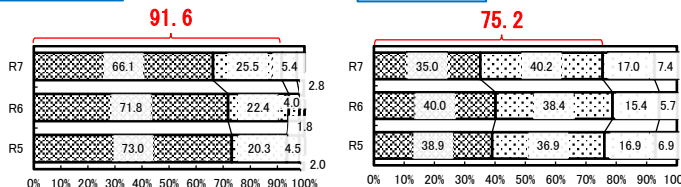
クロス集計



児童〔55〕
生徒〔55〕 算数〔数学〕の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。

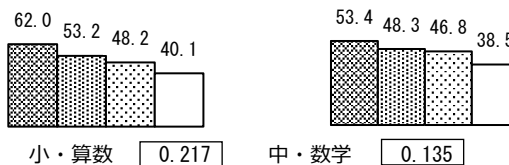
小学校

中学校



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

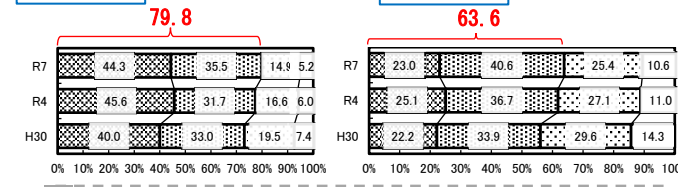
クロス集計



児童〔63〕
生徒〔63〕 理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。

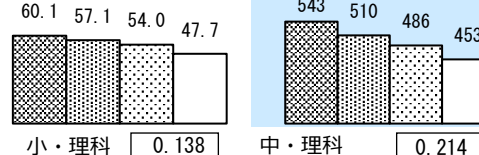
小学校

中学校



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

クロス集計

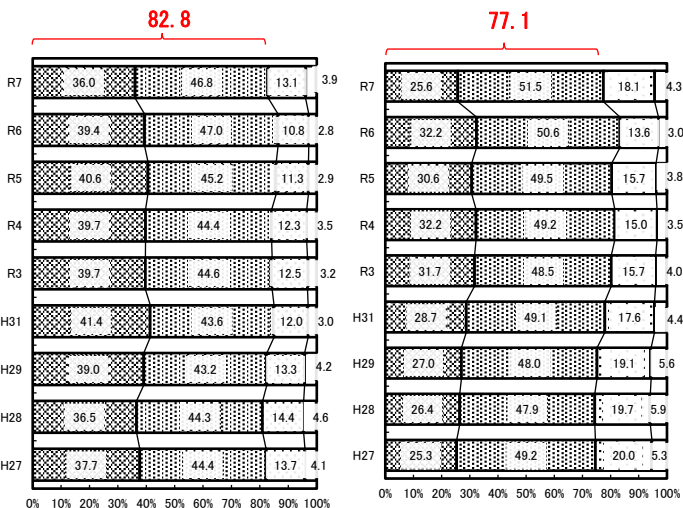


■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

児童〔46〕
生徒〔46〕 国語の授業の内容はよく分かりますか。

小学校

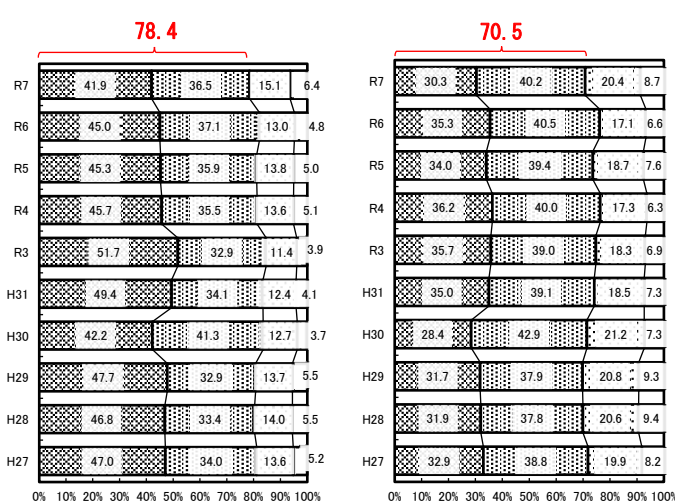
中学校



児童〔54〕
生徒〔54〕 算数〔数学〕の授業の内容はよく分かりますか。

小学校

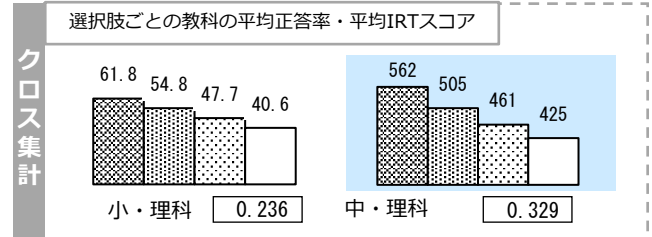
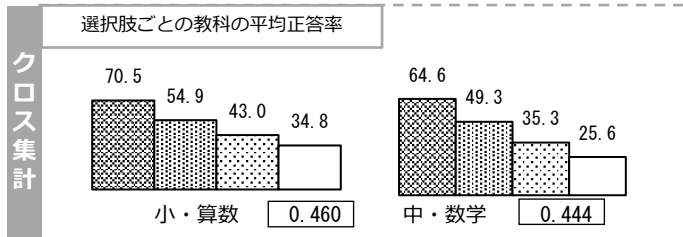
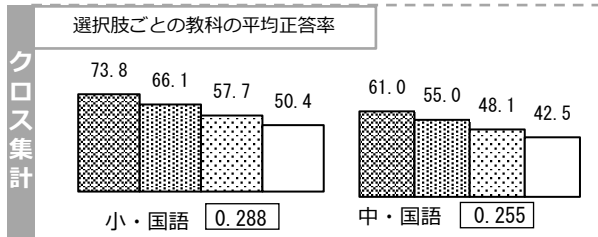
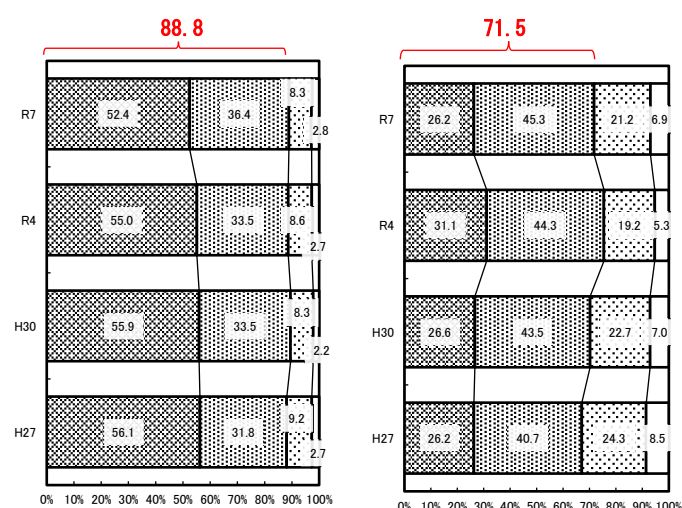
中学校



児童〔62〕
生徒〔62〕 理科の授業の内容はよく分かりますか。

小学校

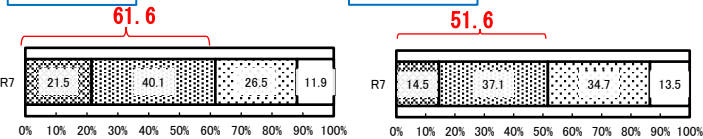
中学校



児童〔44〕
生徒〔44〕 国語の勉強は得意ですか。（新規）

小学校

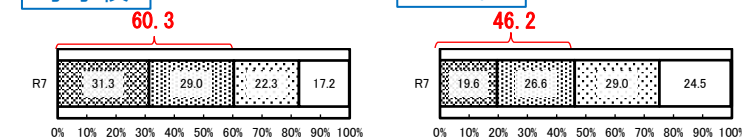
中学校



児童〔52〕
生徒〔52〕 算数〔数学〕の勉強は得意ですか。（新規）

小学校

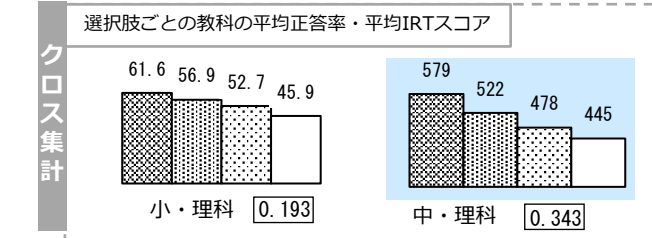
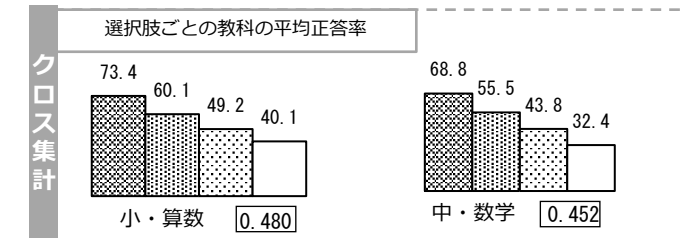
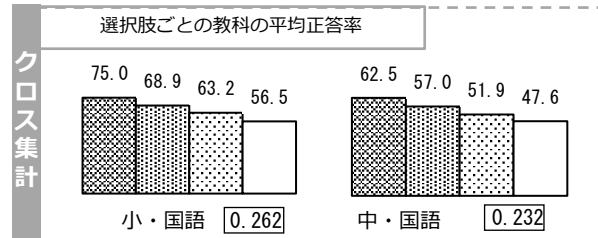
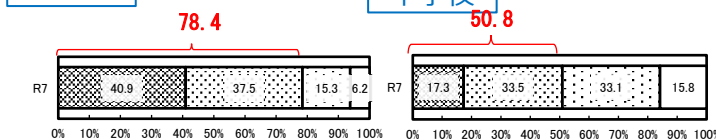
中学校



児童〔60〕
生徒〔60〕 理科の勉強は得意ですか。（新規）

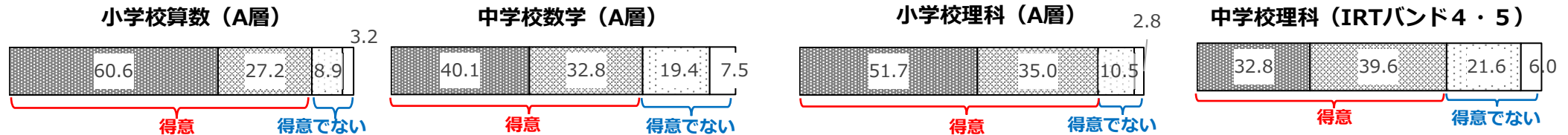
小学校

中学校



「理数・学力層（上位）」 × 「理数・得意ではない」 × 「学習活動」の関係

- 算数・数学、理科の上位層のうち「得意」と考える児童生徒と「得意ではない」と考える児童生徒の特徴を比較した結果、「得意ではない」と考える児童生徒について以下の特徴が見られた。
- ・ 「授業がよくわからない」と回答している割合が高い。
 - ・ 授業等で以下のような学習活動を行っていない割合が高い。
【算数・数学】授業で、どのように考えたのかについて説明する
【理科】理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりする
 - ・ 算数・数学、理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていない。
- ここからすると、例えば、子供たちが学習内容に疑問を持ち、考えの理由を説明させるような授業や、習得した知識を普段の生活や現実の事象と関連づけられるような授業を行うことは、授業を「わかる」と感じさせ、さらに教科を「得意」と感じさせる上でも重要と考えられる。



	小学校		中学校	
	得意	得意でない	得意	得意でない
算数〔数学〕の授業はよくわかりますか。	98.7%	74.6%	97.6%	73.6%
算数〔数学〕の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。	84.2%	56.7%	77.9%	60.1%
算数〔数学〕の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか。	93.6%	76.1%	74.2%	49.5%

	小学校		中学校	
	得意	得意でない	得意	得意でない
理科の授業はよくわかりますか。	98.3%	73.2%	96.1%	64.9%
自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしていますか。	80.5%	49.2%	76.4%	52.7%
理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか。	75.5%	40.9%	75.9%	50.8%

（参考）全国学力・学習状況調査の算数・数学、理科の結果を活用した専門的な分析については、令和5年度文部科学省委託研究（受託者：株式会社エーフォース）、令和6年度文部科学省委託研究（受託者：宮城教育大学）においても詳細に分析を行っている。

🔗 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1344286.htm



「主体的・対話的で深い学び」に応じた低SESグループの学力D層の状況(算数・数学)

ポイント

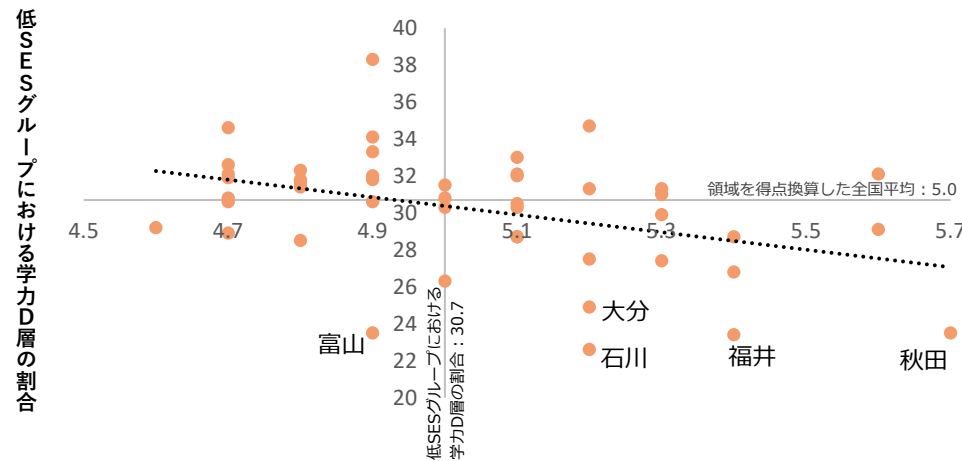
主体的・対話的で深い学びに取り組んだ都道府県ほど、低SESグループにおける学力D層の割合が少なく、学力D層の平均正答率が高い。

縦軸：低SESグループにおける学力D層の割合(左) 平均正答率(右)

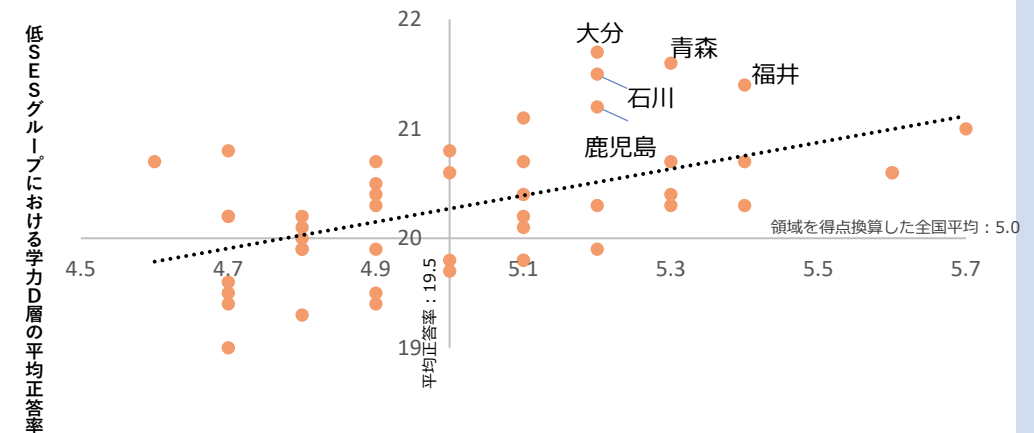
横軸：児童生徒質問調査の領域「4 主体的・対話的で深い学び」の回答状況を得点換算したもの(有効数字2桁)。

全国平均が5.0となるように標準化されており、その値が大きいほど、当該領域において肯定的な回答割合が高いことを意味している。

低SESグループの学力D層の割合

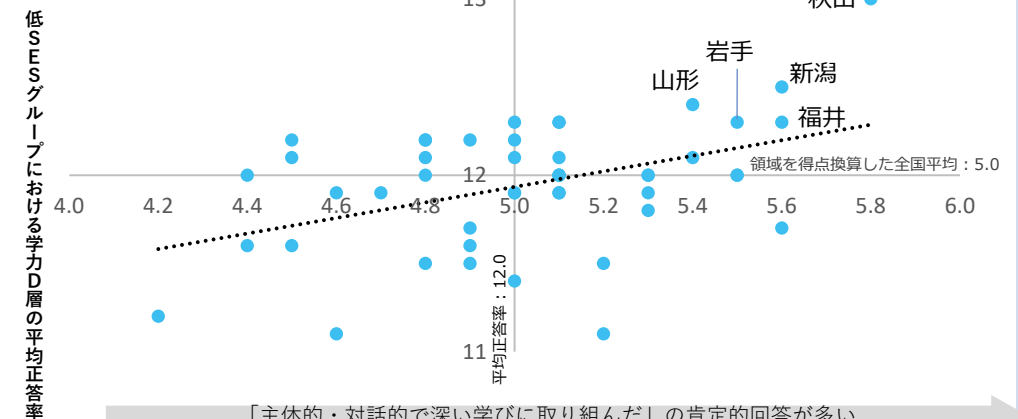
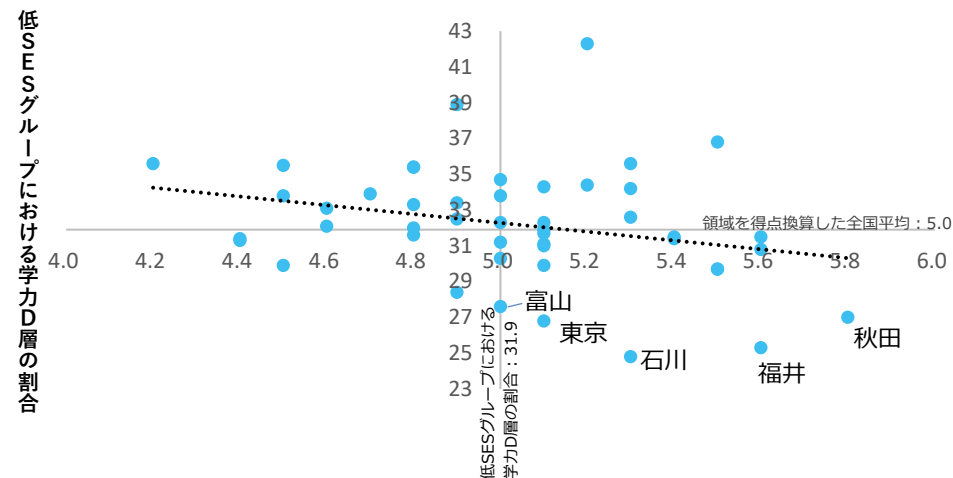


低SESグループの学力D層の平均正答率



小・算数

中・数学



「主体的・対話的で深い学びに取り組んだ」の肯定的回答が多い。

「主体的・対話的で深い学びに取り組んだ」の肯定的回答が多い。

令和7年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」について

○本調査研究の概要

教育施策の検証や学習指導の改善を図る上で、全国学力・学習状況調査の結果の分析・活用が重要。このため、大学等の研究機関等の専門的な知見を活用した高度な分析を行い、成果報告書を公表している。

○令和7年度調査研究の内容

令和6年度全国学力・学習状況調査（以下「令和6年度調査」という。）の経年変化分析調査においては、小学校国語・算数、中学校国語・英語についてスコアの低下が見られる。このことについて、令和6年度調査の保護者に対する調査や、その他の既存の各種データを用いるとともに、必要に応じて追加的な調査を行い、児童生徒の状況、社会経済的背景（SES（Socio-Economic Status））を含む家庭の状況、学校の状況、新型コロナウイルス感染症による生活環境の変化等について分析し、要因を探る。その際、スコアの低下が見られなかった学校等における特徴的な取組事例を収集する。また、児童生徒の学力に影響を与えうる社会変化の影響を捉える手法についても検討する。

【参考】家庭の社会経済的背景（SES）と学校の取組に関する調査研究成果

保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究 （受託者：お茶の水女子大学）（H29）

- 平成29年度全国学力・学習状況調査の追加調査として実施した「保護者に対する調査」の結果を活用し、家庭の社会経済的背景(SES)と学力の関係等について分析している。また、学校がおかれている社会経済的背景(SES)に比べて、継続的に高い学力成果を上げている学校及び成果が上がりつつある学校の特徴も分析している。

【継続的に高い学力成果を上げている学校の共通の取組】

- ・ 家庭学習習慣の定着と家庭への啓発、一人も見逃さない個別指導
- ・ 若手とベテランが学び合う同僚性と学校の組織的な取組
- ・ 小中一貫教育による一貫した学習の構え
- ・ 言語活動や学習規律などを重視した授業改善の推進
- ・ 地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域との連携
- ・ 学力調査の分析・活用による児童生徒一人ひとりの学力形成

【成果を上げつつある学校の事例】

＜学校の環境整備＞

児童生徒が学びに向かうことのできる環境を整える。

＜行政による条件整備＞

県と市からの各種の教師加配による、人員を増やす。

（直接効果）3クラス4展開の少人数指導、学力調査の分析が可能となった。

（間接効果）加配による新たな取組等に関して教育委員会との密接に連携により、教師集団の納得を得て、研究・研修面での新たな取組を促進することが可能になった。

＜校長のリーダーシップ＞

原因を見極め、方向付ける。

学習指導の改革以前に、生徒・保護者との信頼関係の回復を図る努力が奏功。動く教師から動かす、教師集団への指針の提示と対話（繰り返し訴える）。

（参考）平成29年度文部科学省委託事業「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」
保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究（受託者：お茶の水女子大学）

☞ https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1406895.htm



保護者に対する調査の結果を活用した効果的な学校等の取組やコロナ禍における児童生徒の学習環境に関する調査研究 （受託者：お茶の水女子大学）（R4）

- 令和3年度（および過年度）の全国学力・学習状況調査における保護者に対する調査や本体調査の結果等を活用し、社会経済的背景の不利を克服している家庭、学校、教育委員会等について分析している。

【SESの低い層において学力面で成果を上げている学校の取組】

- ・ 個々の子どもに寄り添い、出来るまでやりきらせる基礎基本の徹底
- ・ 子どもが主体的に学習に取り組むための授業の流れ（授業スタンダード）の校内での共有
- ・ 家庭学習、とくに自主学習の良い取組の成果を校内で共有
- ・ 小中連携、小中一貫教育の取組
→子どもの交流の意義、子どもの自己理解を促す意義、教師の合同研修により子どもの情報を途切れずに把握・共有する意義
- ・ 校内研修・研究を「自校のもの」とする認識の高さ
- ・ 教師が日頃から子どものことを話しやすい関係性を生み出す工夫
- ・ 特別支援教育の理解の共有。福祉面での配慮が必要な場合には外部専門家と積極的に連携
- ・ 校内の教員間で様々な情報・事態を日常的に共有しやすい環境・同僚性の高さ

【SESの低い層において学力面で成果を上げている教育委員会の取組】

- ・ 全国学力・学習状況調査を検証する組織の設置（平成27年頃～）
←学力向上に向けた授業改善のアイデアを検討し提供
- ・ 学習指導要領（「主体的、対話的で深い学び」）のコンセプトを実現するための授業アイデアや授業スタンダード等の提供
- ・ 地域住民に向けた教育委員会の取組の広報活動
- ・ 予算措置を必要とする手厚い人的支援

（参考）令和4年度文部科学省委託事業「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」
保護者に対する調査の結果を活用した効果的な学校等の取組やコロナ禍における児童生徒の学習環境に関する調査研究
（受託者：お茶の水女子大学）

☞ https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1416304_00008.html

